

サステイナブル・キャンパス構想に向けた アイデアと知見

聖心女子大学の現状と国内外の実践事例からの展望



「持続可能な社会の創り手育成に向けた PBL
(プロジェクト・ベースト・ラーニング) の推進」事業報告書

2020 (令和2) 年 5 月



2019年度教育改革等推進経費

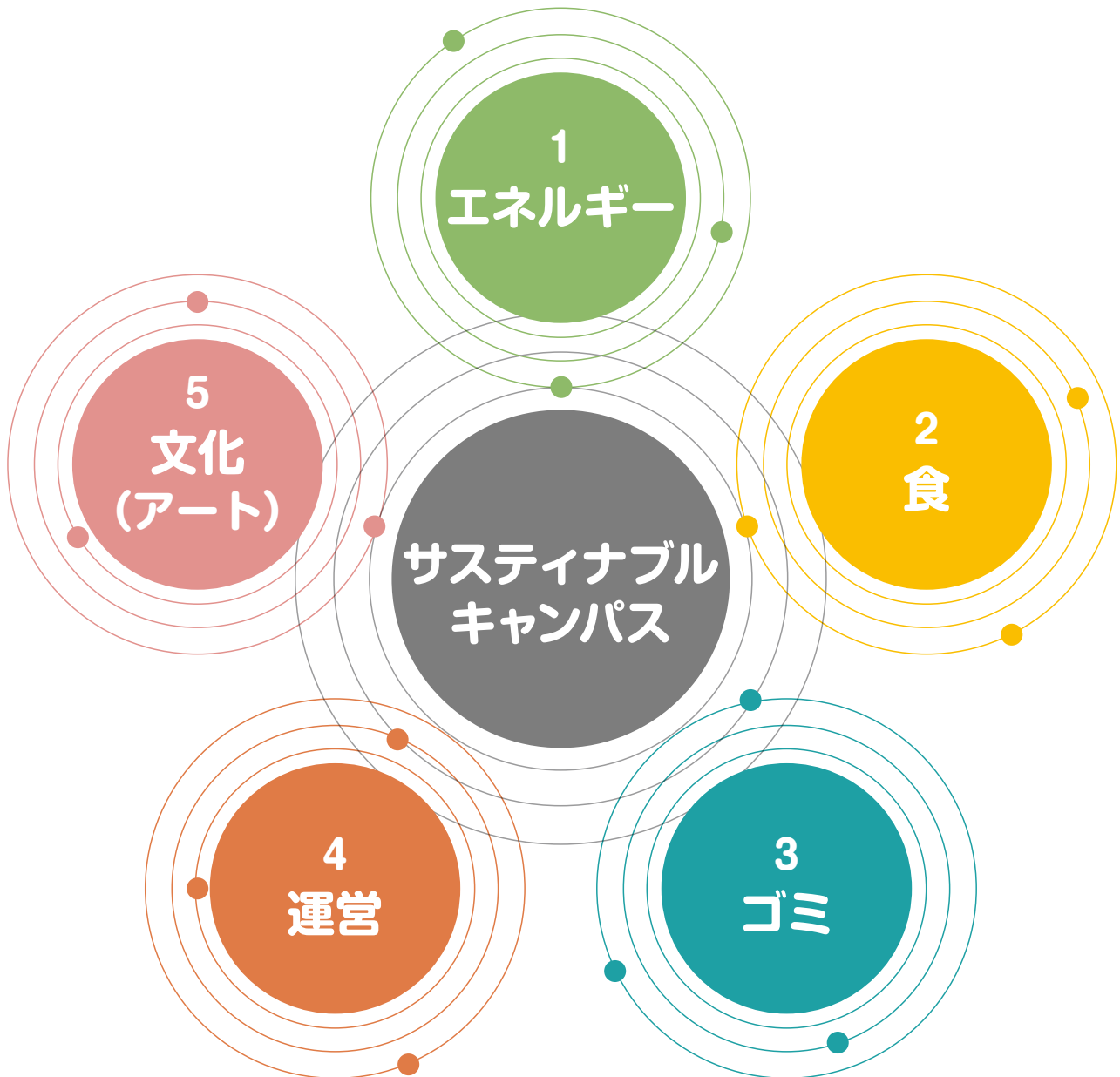
サステイナブル・キャンパス構想に向けた アイデアと知見

聖心女子大学の現状と国内外の実践事例からの展望

「持続可能な社会の創り手育成に向けた PBL
(プロジェクト・ベースト・ラーニング) の推進」事業報告書

2020 (令和2) 年 5 月

サステイナブル・キャンパス構想に向けたチャレンジの領域



目次

目次	i
プロジェクト・メンバー一覧	iii
序	v
1 エネルギー	1
1-1 エネルギーに関する聖心女子大学の現状	2
1-2 事例紹介	4
(1) 千葉商科大学	4
1-3 まとめ	6
囲み記事①	
世界を変える未来のグリーン・リーダーを育てるGreen Schoolを訪問して	7
2 食	9
2-1 食に関する聖心女子大学の現状	10
2-2 事例紹介	11
(1) シューマツハー・カレッジ	11
(2) アジア学院	13
(3) 武蔵野大学 ロハスカフェARIAKE	15
(4) PLANTIO 屋上菜園 サステナパーク恵比寿プライム	17
2-3 まとめ	19
3 ゴミ	21
3-1 ゴミに関する聖心女子大学の現状	22
3-2 事例紹介	24
(1) 資源リサイクル率12年連続日本No.1大崎町	24
(2) 環境モデル都市・水俣市のゼロ・ウェイストに向けた取り組み	26
3-3 まとめ	28

4 運営	29
4-1 運営に関する聖心女子大学の現状	30
4-2 事例紹介	31
(1) グリーンオフィスモデル	31
囲み記事②	
ヨーロッパ諸国の取り組み	33
(2) Operation Green (オペレーション・グリーン)	35
(3) 千葉大学	37
(4) ダイベストメントの提案	39
資料：『あなたの銀行はCOOL BANK?』	42
4-3 まとめ	44
5 文化 (アート)	45
5-1 サステイナブル・キャンパスに向けた田窪恭治先生によるPBL (特別講義&ワークショップ) プロジェクト	46
5-2 特別講義&ワークショップの概要	48
5-3 学生の作品集	50
5-4 田窪先生による講義・ワークショップの記録	59
5-5 田窪先生によるイメージプラン	63
5-6 田窪先生から学生に送るメッセージ	77
5-7 「大切なことは目に見えてくる—不可視のものを形にする—」	79
提言集	81
参考文献	86
むすびにかえて	91

プロジェクト・メンバー 一覧

大学院生及び学部生

神 田 和 可 子	人間科学専攻博士後期課程1年
ス モ ン ・ ピ ソ ン	人間科学専攻博士後期課程1年
木 戸 啓 絵	大学院研究生
安 齋 麻 友 子	人間科学専攻博士前期課程1年
本 川 絢 子	人間科学専攻博士前期課程1年
岡 田 英 里	文学部国際交流学科4年

教 職 員

ブレンダ・ブッシュェル	現代教養学部英語英文学科 教授、サステイナブル・キャンパスに関するPBLアドバイザー
水 島 尚 喜	現代教養学部教育学科 教授、キャンパス・デザインに関するPBLアドバイザー
鈴 木 久 雄	管理部 総務課 施設主事、キャンパス設計に関するアドバイザー
腰 越 朋 子	学務部 教務課 課長、カリキュラムに関するアドバイザー
土 肥 久 美 子	学生部 学生生活課 学生生活課長兼キャリアサポート課長、学生生活に関するアドバイザー

代 表

永 田 佳 之	現代教養学部教育学科 教授、総括
---------	------------------

* 学年および職位等は2019年度のものである。

序

想像してみてください。大学の教室でサステナビリティの大切さを伝えたり、SDGsの理論や優れた実践を教えたりしていることと、学生たちが教室の一步外に出たとたんに目にするキャンパスの光景が重なるとすれば、それはどんなに価値ある教育体験となるでしょう。そしてそうした光景を創り出している大学の管理職や教職員の勇気と持続可能な未来への意志を学生たちが感じ取るのであれば、それがサステナビリティ・リーダー、つまり不確実性の時代を乗り越えていくために求められるリーダーを社会に輩出する一番の近道なのです。

この10年ほどでしょうか。いずこの大学も地球規模の環境や持続可能性に関する授業や講座、スタディツアーなどを組むようになりました。最近では2015年に国連で合意されたSDGs（持続可能な開発目標）が後押しする形でサステナビリティという用語も高校や大学でさしたる違和感もなく使われるようになってきました。本年度からは小学校の教科書で、来年度からは中学校の大半の教科書でSDGsが扱われることが決まり、「SDGsネイティブ」と呼ばれる世代が未来を創っていく時代がすぐそこまで来ています。

こうした傾向は深刻化する気候変動はじめ、悪化の一途をたどる地球環境を考えると、望ましいと言えましょう。しかし、国際的に指摘されている問題があります。それは、教室で教えられているSDGsに関する情報と学校や大学構内で実際に使用されている物や優先される施策とに齟齬があるという問題です。

冒頭に引用した言葉は各国のESD（持続可能な開発のための教育）の成果をモニターする専門家会合で筆者が聞いたイギリスのESD研究の第一人者の発言ですが、こうした「想い」は、この15年ほどUNESCO本部でESDの推進に取り組んできた専門家たちが共通に抱いているものです。

現在、ESDはユネスコ総会を経て、昨年暮れの国連総会でSDGsを実現するための教育として加盟国に認められ、その決議文には「（これから10年の教育には）現状維持の思考・行動・生活からの脱却（ディスラプション）が必要であり、それには勇気と根気と決断が求められる。」と明記されています（ESD for 2030決議文より）。

残念ながら、教員がいくら教室でSDGsの17目標を唱えても、教室の外に出て学生らが目にしたり触れたりする光景や設備が理想とされるメッセージと矛盾していることを学生たちは感覚的に知っていると言えましょう。実際、学内を見れば、身体に決して良いとは言えない食べ物が自販機で売られ、日々残飯が捨てられ、プラゴミが溢れ、電気の浪費が見られるのが通例の高等教育機関です（本学の現状については本報告書本文を参照）。

さらなる問題は、こうした問題が分かっているながら、一般の学生は「どうせ変わらない」という無力感が先立って何も行動を起こさず、そのまま卒業してしまうことです。そして社会人になっても持続不可能な社会構造の中である種の諦念を抱いてしまう……。これでは地球環境が悪化させている社会の悪循環に大学も加担していると言わざるをえません。

このような意識のもとに、15年ほど前からサステイナブル・スクールやサステイナブル・キャンパスという運動が国際的に展開されるに至りました。共通の標語は「教室で教えることをキャンパスで実践しよう！（We practice what we teach on campus!）」です。

幸い、聖心女子大学の学生には上記の「一般の学生」とは決定的に異なる資質や正義感をもつ学生が少なくありません。スウェーデンの環境活動家のグレタ・トゥンベリさんに賛同する学生は珍しくないですし、プラスチック問題などにおいて日常のアクションをすでに起こしている学生もいます。そんなサステイナビリティ・リーダーになるポテンシャルを秘めた学生たちが知識の習得を超えて、実際に足元の環境を改善する成功体験を経ること、そしてそうした機会をソフトとハードの両面において大学が支援することが今、求められています。

それらを実現することは、「勇気と根気と決断」が要ることなのかもしれませんが、まさにそれは聖心スピリットの「個としての自己を確立し、かつ地球を共有する人類の一員として世界を視、人々と交わり、（・・・）広い視野、感受性、柔軟性および実践的な行動力を持つ人間」を育てるミッションそのものであると言えましょう。

サステイナブル・キャンパスと言ってもその領域は多岐に渡ります。チャレンジの領域には、キャンパス内のエネルギー、食（有機食やフードマイレージ）、水（節水等）、CO₂削減（気候変動）、ごみ（廃棄物、プラスチック問題）、学び方（問題解決学習やプロジェクト学習）、預金（環境劣化や紛争等につながる投資からのダイベストメント）などの他、働き方や地域との協働なども含まれます。これらの領域で旧来の慣習を問い直し、さまざまな工夫を凝らすことが重要です。持続可能な未来への工夫が日常で見られるようなキャンパス

で過ごした4年間は卒業生の家庭や職場に多かれ少なかれポジティブな影響をもたらし、持続可能な社会に向けた一助となるでしょう。

本報告は、上記に触れた持続可能な未来に向けた国際的な教育ムーブメント、つまりHESD (Higher Education for Sustainable Development) やサステイナブル・キャンパスの国際ネットワークを意識して「3つのC」、すなわちカリキュラム (Curriculum)、キャンパス (Campus)、コミュニティ (Community) に加え、UNESCOの強調するカルチャー (Culture) という「4つめのC」を念頭に展開した一連の活動に関するレポートです。日本の大学でも「3つのC」は徐々に見られるようになりましたが、4つめのC (文化) は、アート、特に持続可能な未来につながるソーシャル・アートを念頭に取組んだ、国際的に見てもユニークな構想です。これについてはグローバル・プラザ (4号館) の「黄金の林檎」の作者である田窪恭治先生に学生と協働プロジェクトを展開していただき、一連の作品を制作していただきました。この場を借りて、お礼を申し上げます。

さらに、学びのアプローチとしてPBL、つまりProject-based LearningもしくはProblem-based Learningと呼ばれるプロジェクト型もしくは問題基盤型の学習法を採用しました。具体的には、学生たちがキャンパスを歩き、そこでの気づきをもとに現状改善や問題解決の構想を描くという学習・表現手法です。

また、キャンパスにとどまらず、大学院生を中心とした学生グループは、鹿児島県曾於郡大崎町や熊本県水俣市など、国内の環境モデルと言われる地域を実際に訪れ、地元の方々から学び、また千葉商科大学や千葉大学から専門家をお招きしたりキャンパスのツアーに参加したりして、国内の最先端の実践から体験的に学びました。海外については文献調査が中心ではありますが、筆者が従事してきた国際ネットワークの中からフロンティアと言える実践事例を中心に研究を重ねてきました。その詳細についてはぜひ後続の章をご一読ください。

5ヶ月という短期調査でしたが、学生たちはよく調べ、深く学びました。後半は特に新型コロナウイルスの感染拡大により様々な制約を伴う作業が続きましたが、困難な状況下でも学び続けた学生たちは「変化の担い手」としての自覚をもつに至ったと言えます。特に水俣市からいただいた深い学びと〈答えのない問い〉は一人ひとりの人生にとって掛け替えのない体験となりました。この場を借りて、語り部の緒方正実さまやまち案内の小泉初恵さま、水俣病センター相思社やガイアみなまた、エコネットみなまた、水俣市環境クリーンセンターの皆さまに心よりお礼を申し上げます。また、松元昭二さまはじめ大崎町役場住民環

境課環境対策係の皆さま、原科幸彦学長はじめ千葉商科大学の皆さま、千葉大学環境ISO事務局や環境ISO学生委員会の皆さま、世織書房の伊藤晶宣さま、丹波博紀先生、そして本調査をお認めいただき、学内でのご支援とご理解を賜りました高祖敏明学長はじめ学内の教職員の皆さまにも謝意をお伝え致します。

本文の行間には、広尾のキャンパスや各地のフィールドで調査に没頭した聖心女子大学の学部生や大学院生たちの愛校心を読み取ることができます。本報告書が次世代の想いが実現していく一助となることを願ってやみません。

2019年5月8日

2019年度教育改革等推進経費

「持続可能な社会の創り手育成に向けたPBLの推進」事業・代表

永田 佳之



1-1 エネルギーに関する聖心女子大学の現状

表1-1は平成28年度から平成30年度の本学におけるエネルギー使用量の推移を示しています。水道使用量、LPガス使用量はほぼ一定であるのに対し、電気使用量、都市ガス使用量は増加傾向にあります。一方、平成30年度のA重油使用量は平成28年度の使用量に比べて約40%減少しています。

表1-1 平成28年度から平成30年度の本学におけるエネルギー使用量の推移¹

	単位	平成30年度	平成29年度	平成28年度
電気使用量	kWh	2,867,748	2,523,695	2,246,971
都市ガス使用量	m ³	125,831	91,615	86,888
水道使用量	m ³	54,413	54,977	53,236
LPガス使用量	m ³	145	148	158
A重油 ² 使用量	L	85,172	128,087	141,413
原油換算量	KL	949.7	867.95	678.32
CO ₂ 排出量	トン	1944.61	1818.81	1364.08

また、表1-2は平成30年度の夏期（7月～9月）、冬期（12月～3月）中間期（夏期・冬期以外の月）における代表的な1日の電力量日負荷変動を示しています。冷暖房が必要となる夏期や冬期の電力使用量は中間期の使用量を2倍弱上回っていることがこの表から読み取ることができます。



表1-2 平成30年度 期間別 電力量日負荷変動³

	夏 期	冬 期	中 間 期
記録日	2017.7.14	2018.1.11	2017.10.16
時刻	電力量 (kWh)	電力量 (kWh)	電力量 (kWh)
8~9	582	613	342
9~10	656	777	429
10~11	939	970	506
11~12	967	940	501
12~13	913	901	533
13~14	922	828	558
14~15	882	773	549
15~16	841	718	539
16~17	778	687	521
17~18	615	640	457
18~19	512	581	420

文責：スモン・ピソン

〈注〉

¹ 総務課による資料「エネルギー使用量（3年間）」より。² A重油とは蒸気暖房用燃料を指します。マリアンホール1階や1号館2階教室にある銀色の古い暖房の燃料として使われています。³ 総務課による資料「省エネ診断（2018エコリーグ）」より抜粋。

1-2 事例紹介

(1) 千葉商科大学

千葉商科大学は2014年度に省エネ・創エネプロジェクトを立ち上げました。学内電力消費量の77%を発電し、残り23%を省エネ・創エネして学内の電力消費量を差し引き100%にする自然エネルギーキャンパスへの移行に取り組み始めたのです。2018年3月には「環境・エネルギー」プロジェクトメガソーラー発電所の発電量と大学のエネルギー使用量を同量にする「自然エネ100%大学」を目標として掲げています。

学生団体「Student Organization for Natural Energy (SONE) 自然エネルギー達成学生機構」は、学生目線で省エネや地球温暖化防止への取り組みとしてキャンパス内の自動販売機を省エネ型にすることを提言して、実現させました。また、「コミュニティカフェ・プロジェクト」では、地域住民も利用できるカフェを開き、環境や社会に配慮した商品やサービスを選択するエシカル消費を啓発するような活動を行なっています。

2016年5月には「CUCエネルギー株式会社」を設立しました。省エネ機器のリース事業、環境・エネルギーに関する知見の提供・共有による「自然エネルギー100%大学」の実現を支援して、地域の各事業所への再生可能エネルギー導入促進や、省エネのノウハウ提供、将来的には、千葉県内の自然エネルギー源の開発や東葛地域や東京などの県内県外への電力小売事業などの展開を構想しています。環境目標の実現に向けて、ハードウェア、ソフトウェア、ハートウェアという3つの柱で、取り組んでいます。

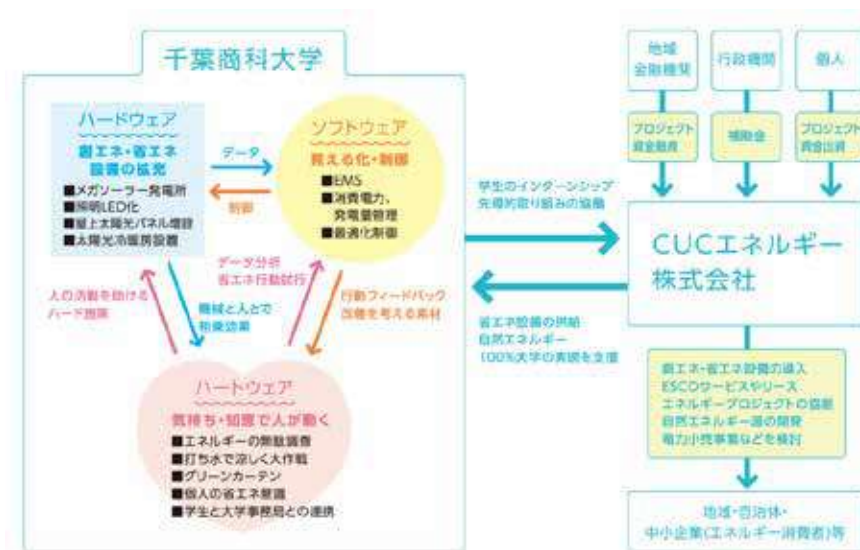


図1-1 環境目標達成へのスキーム¹

千葉商科大学の市川キャンパスは緑に溢れ、開放感のある立地に位置しており、自然光や雨水の有効利用や空調の省エネ化などに取り組みから「グリーンキャンパス」と呼ばれています。

エコキャンパスとなるために、キャンパス内にはさまざまな工夫が施されています。例えば、建物内に太陽の光をうまく取り入れ、電灯や照明の無駄を減らすトップライト、ハイサイドライトの採用をしています。さらに、2004年から古紙を回収業者に預けることをやめ、独自のリサイクルとしてオリジナル・トイレトペーパーを製作する取り組みも行っています。



千葉商科大学に設置されているソーラーパネル²

文責：スモン・ピソン

〈注〉

¹ 千葉商科大学 「目標達成へのスキーム」 [https://www.cuc.ac.jp/about_cuc/activity/environment/scheme/index.html] (2020年4月14日閲覧)

² 千葉商科大学 「キャンパスの太陽光発電設備」 [https://www.cuc.ac.jp/about_cuc/activity/environment/solar/index.html] (2020年4月14日閲覧)

1-3 まとめ

聖心女子大学のエネルギー使用量は増加傾向にあります。特に夏期・冬期の電力使用量が中間期の使用量の2倍近くになってしまっています。

この現状を解決に導くために取り組むべきことを、千葉商科大学の事例に習い、ハードウェア、ソフトウェア、ハートウェアという3つのカテゴリー別に提案をします。

1. ハードウェアカテゴリー

- ①大学内の照明のLEDライトへの取り替え
- ②建物内に太陽の光をうまく取り入れるようにするための窓の増設
- ③キャンパス内の自動販売機の省エネ型のものへの取り替え
- ④電力を作るためのソーラーパネルの設置（設置場所として屋上の活用）

2. ソフトウェアカテゴリー

大学内で創出・消費している電力の数値を、大学を利用する誰もが確認できるシステムの導入

3. ハードウェアのカテゴリー

使用していない教室の電気を消すことや使用していない電化製品のプラグをコンセントから抜くことを学生や教職員へ啓発活動

教授や学生だけではなく、大学職員も一緒に協力してエコキャンパスを目指していけると良いでしょう。

文責：スモン・ピソン



囲み記事

1

世界を変える未来のグリーン・リーダーを育てるGreen Schoolを訪問して

Green Schoolの写真¹

世界から注目されている学校がインドネシアのバリ島ウブドにあります。元国連事務総長パン・ギムン氏が2014年国連気候変動サミットの直前に訪れたことでも知られています。

2008年にジョン・ハーディー氏と妻のシンシア・ハーディー氏によって設立されたGreen Schoolは、「持続可能性」をキーワードに自然環境と調和し、地元社会との共生、必要なものは自ら賄うことを追求した学校です。夫妻は映画『不都合の真実』（2006年）を観たことがきっかけで、教育の力で未来を変えていこうと学校建設を決意しました。

Green Schoolは3歳から18歳の生徒たちが約400名通っています。出身国はインドネシア以外に欧米、アジア諸国、中南米、アフリカ…と実に多様な人種の子どもたち、教師、スタッフがいます。公用語はインドネシア語と英語です。

まずキャンパスに一步足を踏み入れた瞬間から目を引くのは、竹で作られた建築物です。しなやかな曲線を描く竹、壁のない教室、風が吹くと笹がゆれ、笹や竹の隙間から木漏れ日がさし、自然と一体になれる心地よい空間です。

学校のエネルギーは、欧州の企業から寄付された太陽光発電を使用し、約8割は太陽光発電、残りの2割は川の水を利用した水力発電によって自給自足で賄っています。学校にはバイオバスがあり、子どもたちの登下校に使われています。また、食に関しても遺伝子組み換え作物を排除した無農薬有機栽培にこだわり、子どもたちがスタッフとともにキャンパス内でプロジェクトを実施しています。作物を育てる田畑の土壌は、コンポスト・トイレの排出物や食べ物の廃棄物から作られる堆肥を活用しています。学校には農場（Kul Kul Farm）が隣接しており、子どもたちはそこで育てた食材で作られたオーガニックおやつをキャンパス内にある売店で購入することができます。

学校環境や施設だけではなく、教育手法も革新的です。特に環境問題に対し、経済・社会の視点を持ちながら問題を解決していく人間を育むことに注力しています。幼稚園から自然や社会とのかかわりを体験し、小学生になるとプロジェクトを推進するようになります。その成果として例えば、バリ島からビニールのレジ袋をなくす活動「バイバイ・プラスチックバッグ」を実施し、バリ州知事から合意文書にサインを取り付けるまでのプロジェクトが誕生しました。プロジェクト・ベースド・ラーニング（Project based Learning: PBL）が主流ではありますが、学びの4本柱としてLeadership（リーダーシップ）、Sustainability（持続可能性）、Cultural Appreciation（文化理解）、Nature-based Education（自然に基づく教育）が掲げられています。進路は、国際バカロレアの基準を満たしているため、世界中の高校および大学への進学には支障ありません。また、評価手法はルーブリック等の手法を用い、学びのプロセスを重視しています。

2020年にはニュージーランド校、2021年には南アフリカ校、メキシコ校が開校する予定です。

このような学校づくりを私たちの地域（大学）でもできるでしょうか？

そのような問いに創設者であるジョン氏は迷わず「できるはずですよ」と答えます。そして続けて「ただ従うべきルールはいたって簡単です。地域に根差し、環境保護を優先し、孫の世代が望むものを考えるのです」。

教育、そして社会の新しいあり方を私たちがいまいる場所から見直してみませんか。

文責：神田和可子

〈注〉

¹ 筆者撮影（2019年8月30日）



2-1 食に関する聖心女子大学の現状

聖心女子大学には、メインキャンパスの学生食堂、学寮食堂「オリーブ」、カフェ「La Mensa jasmin」（ラ メンサ ジャスミン）の3つの食事処があります。ここでは、学生食堂と「La Mensa jasmin」の食材がどこから来ているのかについて述べます¹。

学生食堂では、食材をあらゆる場所から仕入れています。野菜は多くが関東圏ですが、東京都で生産された野菜はありません²。関東以外の地域では静岡県や愛知県、徳島県、福岡県、鹿児島県、宮崎県などの九州地方、宮城県、北海道があげられ、南瓜はニュージーランド産のものを使用しています。また、学生食堂職員へのインタビューから、肉類は国産ではない可能性がある点、米は国産だが生産地は時期による点、麺は大手メーカーの冷凍のものである点がわかりました。

「La Mensa jasmin」で使用している食材の産地について詳しい調査はできませんでしたが、一部の食材は学内サークルの「Green Thumb（グリーン・サム）」によって提供されています。グリーン・サムは学内にある畑で完全無農薬の野菜・ハーブ・果物などを栽培しています。栽培の工程ではゴミを出さないよう、不要になった葉などは土に還し、新たな生命を育むための肥料として再利用しています。愛情込めて育てられたハーブは4号館のカフェ「La Mensa jasmin」で販売されています。

以上をまとめると、「グリーン・サム」によって栽培されたハーブが「La Mensa jasmin」で使われている一方、それ以外の食材、特に学生食堂の食材はさまざまな生産地から輸送されていることがわかりました。学内での生産や地元などの近接地域からの輸送を試みることで、およびどのように育てられた食材なのかに留意していくことが求められるでしょう。

文責：本川絢子・神田和可子

〈注〉

¹ 「オリーブ」については現状の追跡ができていないため、今回は省くものとします。

² (株) 第一食育研究所「2020年3月・4月品目予測表（2020年3月）」（学生食堂提供資料）



2-2 事例紹介

(1) シューマッハー・カレッジ

英国デヴォン州に、持続可能な暮らし方を実際に学生に体験させる学びを実践している、シューマッハー・カレッジという高等教育機関があります。ここでは、同機関の食事に関する取り組みについて、食材の調達方法、メニュー、学生の関わり方の3点に焦点を当てて述べていきます。

①食材の調達方法

シューマッハー・カレッジでは、学内で食べる食材のほぼ50%を自ら育てています¹。カレッジの敷地のすぐ隣には、農薬や化学肥料を使用したり、森林を伐採したりせずに、農と森を融合させた農園であるフォレスト・ガーデンが設けられています²。そこには果樹、堅果のなる稚樹、放牧で育てられた草を食べている家禽などがいます³。加えて、ハーブ園、ビニールハウス、多年生の菜園などももっており⁴、これらの場所から食材を調達しています。栽培エリアではコンポストや緑肥が使用されています⁵。学内の食材のおこりは可能な限り地域のものを使用しています⁶。また、フェアトレード商品を扱うことや遺伝子組み替え食品を使用しないことも心がけています⁷。

②メニュー

カレッジの食事は環境負荷や貧困問題の解決に向けて、ベジタリアン料理にしています⁸。食材の普通なら捨てられてしまう部分（根っこや切れ端など）も料理に生かされ、全体食の考え方を重視しています⁹。



シューマッハー・カレッジの食事¹⁰

③学生の関わり方

シューマッハー・カレッジでは、学生も料理や掃除、食器洗い、園芸などの仕事を担っています。それゆえ、学生は食材の世話や料理に関わることになります。加えて、食事の時間は全員同じで、学生や教員、スタッフなどのカレッジに携わる人全てが集います。食事の時間に多くの人と交流することができるようになっているのです。

以上がシューマッハー・カレッジでの食に関する実践です。食材を自ら育て、食べ終わるまで自然と人の健康を意識した好循環を生んでいる点、その好循環のなかに学生が園芸と料理で関わる点、地域の食べものでまかなうことなども加えて食の循環の中で社会的公正を考慮している点、この循環を通して自然や他者とつながりを築いている点が特徴と言えるでしょう。

文責：本川絢子

〈注〉

¹ Schumacher College. 'About the College'. [<https://www.schumachercollege.org.uk/about>] (Accessed: March 20th, 2020.)

² (2013) pp.162-163

³ Schumacher College. 'Schumacher College Gardens and Food'. [<https://www.schumachercollege.org.uk/schumacher-college-gardens-and-food>] (Accessed: March 20th, 2020.)

⁴ 同上

⁵ 同上

⁶ Schumacher College. 'About the College'. [<https://www.schumachercollege.org.uk/about>] (Accessed: March 20th, 2020.)

⁷ Phillips. 2008. p.47.

⁸ Ibis. p.46

⁹ 辻 (2013) p.43

¹⁰ 筆者撮影。



(2) アジア学院

栃木県那須塩原市に学校法人アジア学院があります。1973年に設立し、2023年に50周年を迎えます。学習者は主に、アジア・アフリカ・中南米・大洋州の農村地域から草の根で働く人々です。研修期間は4月から12月の9カ月間あり、学習者は職員およびボランティアと共同生活をします。

学院における3つの鍵概念には 1) サーバント・リーダーシップ 2) フードライフ 3) コミュニティ・オブ・ラーニングがあります。中でも重要視されている概念はフードライフです。フードライフとは、「食べ物といのちは共に切り離すことができない」というアジア学院で使われる特有の言葉です。それを象徴するように、キャンパスの中心にはコイノニア食堂があり、みなで共に食事をします。いのちをいただく喜びや感謝を分かち合う場でもあります。



コイノニア前の壁画「ハーベスト」¹

食に関して大きな特徴的な取り組みは有機農業です。40年以上取り組みを続けています。特に畑の土や肥料には手間ひまかけ、循環を生み出す工夫を凝らしています。台所の生ゴミや落葉、雑草、地域の豆腐屋のオカラ、学院で飼育している豚や鶏の糞尿も浄化後に肥料として土に還しています。また、食料自給率は90%以上を常に維持しています。有機農業の家畜の飼料までも自給で賄う徹底ぶりです。その結果、フード・マイレージを抑えることにもつながっています。さらに現在では、ガソリンの代わりに廃油を燃料とするバイオディーゼルの製造に向けた取り組みも始めています。





アジア学院での聖心女子大学サーバント・リーダーシップ研修の様子²

このように、アジア学院では「共に生きるために」を学院のモットーとし、自然との調和を意識した有機農業による自給自足の生活を基本とした実践的な学びを行っています。

文責：神田和可子

〈注〉

¹ 筆者撮影。スリランカ出身画家ナリニ・ジャヤスリヤ氏の作品。

² 撮影：永田佳之



(3) 武蔵野大学 ロハスカフェARIAKE

たくさんのオフィスビルやホテルが立ち並ぶ都心の中にも、自然を感じることができるあたたかいカフェがあります。武蔵野大学有明キャンパス内にあるロハスカフェARIAKEです。ロハスカフェは有機野菜、有機豆乳や玄米を使った「身体にやさしいイタリアン」を提供し、「身体にやさしく、自然をいただく」ことを提案しています。

ロハスカフェの最大の特徴はカフェで使われている野菜がキャンパス内で学生によって栽培された有機野菜であるという点です。

同大学には環境システム学科の学生が運営する「U.P. LAB（アーバンパーマカルチャーラボ）」という団体があります。U.P. LABとはパーマカルチャーの理念に基づき、都心に「人と人、人と自然」が共生する場所をデザインし、循環型社会の形成を目指して活動をしている団体です。

ロハスカフェで使われている食材はU.P. LABのメンバーによって、キャンパス内の建物の屋上で栽培された有機野菜を使用し、お料理を提供しています。そして虫食いや腐食によって調理に使えなかった野菜をはじめとするカフェで出た生ゴミはU.P. LABのコンポストプロジェクトによって肥料に生まれ変わります¹。その栄養豊富な肥料を用いて再びU.P. LABのメンバーによって野菜が栽培され、カフェにて提供されます。以上のようにロハスカフェでは「キャンパス内で循環する食材」が使われています。



屋上ガーデンでとれた野菜²

U.P. LABのプロジェクトに参加した学生からは、プロジェクトを通して、マイボトルを持ち歩く、食品ロスを減らすなど日常的に地球にやさしい行動を心がけるようになったという声が上がっています³。またカフェでは環境をテーマにした映画の上映会を行い、環境や社会について話ができるコミュニティづくりも行っています。このようにロハスカフェは学生に限らず、一般のカフェ利用客にも環境問題を考えるきっかけを与えてくれます。

有機野菜を使った身体にやさしい「食」を提供するだけでなく、「環境問題」を考えるきっかけを与える役割を担っていることもロハスカフェの特徴の1つといえるでしょう。

文責：安齋麻友子

〈注〉

¹ U.P. LABは屋上での有機野菜の栽培やコンポストの他に養蜂・雨水利用・廃材などを利用したモノづくり・生物（鶏）飼育・エネルギーの自給自足等にも取り組んでいます。

² U.P. LAB ホームページ [https://uplabmu.com/]（2020年4月19日閲覧）

³ 山本茉由 「武蔵野大学 ロハスカフェARIAKE」 『Campus Scope』, 2019, vol.43, p.12



(4) PLANTIO 屋上菜園 サステナパーク恵比寿プライム

現在、アメリカやオランダ、ドイツなどの欧米諸国中心に「アーバンファーム」という農業が行われています。アーバンファームとは「都市型農業」のことを指し、地方にある田畑ではなく、人が集中する都心部で野菜を育て収穫することを意味します。

アーバンファームが行われる主な背景として、気候変動の問題があります。豪雨や干ばつなど近年頻発する自然災害は、作物の不作や水不足、土壌の劣化などを招き、食料の生産量に大きな影響を与えます。また、グローバル化によって食料の輸入が多く行われるようになり、フードマイレージの発生によって気候変動の加速に繋がったり、自国の食料自給率の低下の問題も発生しています。アーバンファームは、そのコミュニティで作物が生産されることから、自給自足や地産地消を行うことができ、フードマイレージの問題を改善することができます。また、今日のような不確実な時代だからこそ、コミュニティで生産し消費することで人と人とが繋がり、予測不可能な事態にもレジリエンスを伴って対応することができると言われてしています。

このアーバンファームの取り組みは、日本でも広がりを見せています。例えば、恵比寿にあるオフィスビル「恵比寿プライムスクエアタワー」の屋上では、「PLANTIO (プランティオ)」という、テクノロジーを下支えとした持続可能な食と農の実現に取り組む企業を中心となって、屋上菜園「サステナパーク恵比寿プライム」を運営しています。



サステナパーク恵比寿プライム (左)¹と収穫された野菜 (右)²

そこでは屋上という場所を活かして、日光を大いに浴びた完全無農薬の新鮮な野菜が栽培されています。菜園の管理は専用のアプリを通して行われ、会員どうしで栽培や水やりなどを行っています。さらに、収穫した野菜はイベントや子ども向けの食育の授業に使用されたり、近隣の飲食店に持ち込み調理をすることもできるため、ファームを中心にコミュニティ形成をする機会ともなっています。

このように、持続可能な農業の在り方を通して、大都会において現代社会が抱える問題の解決に取り組んでいくことができます。

文責：岡田英里

〈注〉

¹ Grow Journal ホームページ [<https://media.plantio.com/urbanfarming/>] (2020年4月12日閲覧)

² 筆者撮影。



2-3 まとめ

聖心女子大学の学生食堂で使われている食材は、様々な場所で生産されたものでした。野菜の生産地は関東圏が多いものの、九州や北海道など全国各地にわたり、海外から輸入している野菜もありました。また、米は国産、麺は大手メーカーの冷凍食品を使用しており、肉類はおそらく国産ではないことがわかりました。しかし、学内団体のグリーンサムが栽培しているハーブが「La Mensa jasmin」で使用されるなど、自然にやさしい生産方法によって学内で栽培された食材を使っている事例も見られました。

アジア学院とシューマッハー・カレッジ、ロハスカフェの事例では、食材の生産からゴミの肥料化までの好循環を生んでいる点と、人と自然の調和、人どうしのつながりを大切にしている点が共通していました。この取り組みから、以下の事項を本学でも実施することを提案します。

1. 学生食堂やカフェで使用する食材の学内生産率を高める
2. アーバンファームによるエディブルガーデンを4号館等の屋上につくる
3. 学生食堂やカフェで出る生ゴミ、馬術部の馬糞等を学内のエディブルガーデンの肥料として再利用する
4. 大学から近い生産地の食材を使い、フェアトレード食品以外の外国産の食材を使わないようにする
5. 多くの学生が畑作業に参加することで単位取得ができるような科目を設置する
6. 学内で食べる食材の生産者がわかるように、学生食堂やカフェに写真付きのポップを掲示する
7. 食堂やカフェの職員と交流を深める文化（あいさつの文化）を形成する

文責：本川絢子





3-1 ゴミに関する聖心女子大学の現状

本学のゴミの現状として、ゴミの種類別と処理までの流れの2つの観点から、以下4点を挙げる事ができます。

まず、ゴミの種類別の課題として、ペットボトルの廃棄量、食品ロス、資源ごみの増加を挙げる事ができます。以下の表3-1が示すように、ペットボトルの場合3年間で0.9t、紙類、特にコピー用紙・OA用紙を中心に、0.3tの増加していることが分かります。

表3-1 ペットボトルとコピー用紙、OA用紙等の廃棄量 (2016~2018) ¹

	ペットボトル (t)	コピー用紙、OA用紙等 (t)
2016年度	1.4	14.9
2017年度	2.1	15.2
2018年度	2.3	15.3

また表3-2の学生食堂と4号館カフェ²を合わせた食品ロスの量についても、2016年度~2018年度の3年間に於いて増加傾向にあることが分かります。

表3-2 学生食堂と4号館カフェを合わせた食品ロスの量 (2016~2018) ³

	2016年度	2017年度	2018年度
生ゴミ・食品ロス (t)	3.9	5.8	9.2

これら学生にとって比較的身近な3項目は、本学が排出するゴミの種類の中でも、際立って増加傾向にあると言えます。

次に、ゴミが処理されるまでの流れの課題として、循環型を意識したゴミ処理が行われていないことがあげられます。以下の図3-1が示すように、大学で出されたゴミは本学内で処理されず、学外の業者に委託する形で処理されていることが分かります。

これは、資源の循環を意識したサーキュラーエコノミーとは真逆の直線型を意識した、リニアなゴミ処理方法であることが分かります。

以上のようなゴミの現状がある一方で、本学ではゼミの取り組みや学生団体による、ゼロウェイストを意識した活動も行われています。



図3-1 ごみ処理・リサイクルフロー図⁴

1つ目は、英語英文学科のBrenda Bushell先生（以下、ブッシュェル先生）のゼミでの取り組みによる、コンポストです。学生食堂の裏にあるコンポストの箱では、学内の枯れ葉などを使用して堆肥を作っています。ブッシュェル先生のゼミでは、ゼミ活動の一環として学生がコンポストの管理をし、作られた良質な土は聖心祭でゼミ発表と共に配布をしています。

2つ目は、本学公認サークルGreen Thumbの活動です。この団体は、学内にある畑で完全無農薬の野菜やハーブを栽培しています。栽培の工程では、ゴミを出さないよう、不要な葉などは土に還し、肥料として再利用しています。また、その畑で育てられたハーブは、4号館にあるカフェ La Mensa Jasminで、ハーブティーとして提供されています。

文責：岡田英里・本川絢子

(注)

¹ 総務課資料「再利用計画書」2016～2018より筆者作成。

² 4号館カフェは2017年度から2018年度にオープンしていた「Café Jasmin」を指す。

³ 総務課資料「『事業用大規模建築物における再利用計画書』裏面 作成用ワークシート」2016～2017および「学内データ(食品ロス)」2018より筆者作成。

⁴ 総務課資料「ごみ処理・リサイクルフロー図」より抜粋。

3-2 事例紹介

(1) 資源リサイクル率12年連続日本No.1大崎町

鹿児島県の東南部に大崎町という、面積約100キロ平方メートル、人口13,500人ほどの小さな町があります。大崎町は埋め立て処理場の残余年数が逼迫したことを背景にリサイクル活動に取り組み始めました。「混ぜればごみ、分ければ資源!」というモットーを掲げ、27品目ゴミ分別等に取り組んだ結果、平成29年度現在の大崎町ゴミのリサイクル率は82%となり、全国平均と比較して約60%上回るリサイクル率を実現し、12年連続リサイクル率日本一に輝き続けています。

そんな大崎町の取り組みの1つに「菜の花エコプロジェクト」というものがあります。「菜の花エコプロジェクト」とはかつて大崎町に広がっていた、見渡す限りの菜の花畑を復活させるために菜の花の栽培を行い、食用油として特産品開発や使用した菜種油を回収して軽油代替燃料（BDF）として活用する等、町の資源の循環を目指すプロジェクトです。

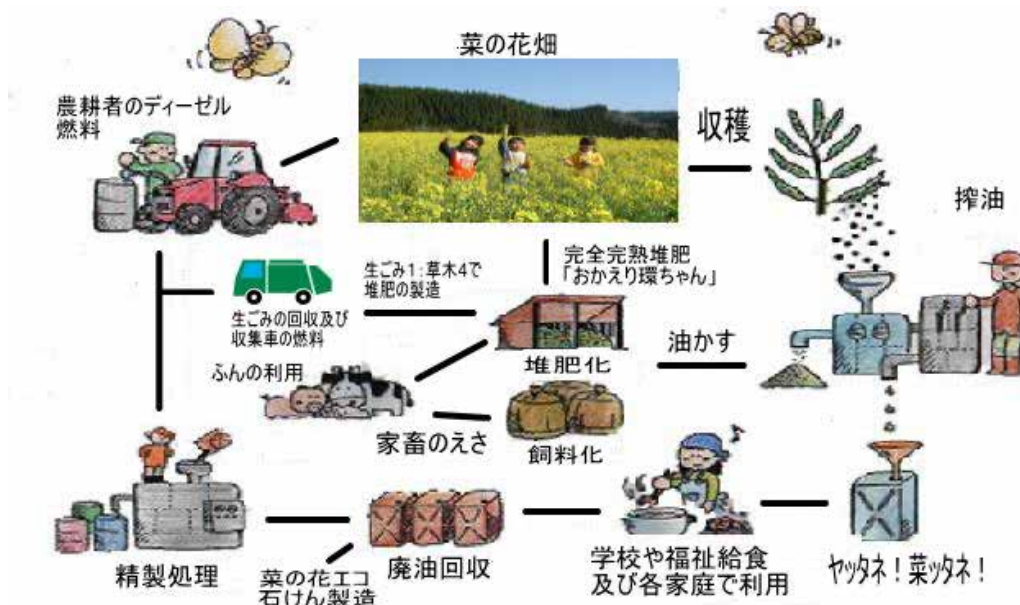


図3-2 「菜の花エコプロジェクトの流れ」¹

このプロジェクトに関して、生ゴミの循環に焦点を当てて詳しく紹介をします。

従来、大崎町から出る生ゴミは全て埋め立て処理をしていました。しかし、平成13年より、埋立

地の延命科と生ゴミの資源化・減量化を目的として生ゴミの分別収集が始まりました。

現在、生ゴミの収集は各自治体のゴミステーションに設置されたバケツによって、1日おきに（月・水・金に回収される自治体と火・木・土に回収される自治体とにわけて）実施されています。回収された生ゴミは「そおりサイクルセンター大崎有機工場」に運ばれ、災害で出た木や家庭から出た草木剪定くずと混ぜ合わせ、約4ヶ月半かけて完熟堆肥に生まれ変わります。家庭から出た草木剪定くずも紐で結んだり、専用のピンクの袋に入れたりして生ゴミと一緒に捨てられ、回収されています。

「そおりサイクルセンター大崎有機工場」で作られた完熟堆肥は「おかえり環ちゃん」と名付けられ、リサイクルセンターが所有する農場や菜の花畑への利用はもちろんのこと、一般家庭へも販売されています。



生ゴミから生まれ変わった完熟肥料「おかえり環ちゃん」²

以上に紹介した通り、リサイクル率日本一である大崎町の取り組みの中でも生ゴミの循環に関する実践は特に優れているといえるでしょう。

文責：安齋麻友子

〈注〉

¹ 大崎町役場 「菜の花エコプロジェクト」 [https://www.town.kagoshima-osaki.lg.jp/jk_kankyoutaisaku/kurashi/gomi/recycling/ecoproject.html]（2020年3月20日閲覧）

² 筆者撮影。

(2) 環境モデル都市・水俣市のゼロ・ウェイストに向けた取り組み

二つの川に挟まれていることが由来となって名付けられた地、水俣市は熊本県の最南端に位置しています。水俣という地は風光明媚な景色で人々を魅了する一方で、重く長い公害問題の歴史を持つ地としてこの地球上での人としての在り方を人々に問い続けています。

水俣市は1992年（平成4年）より、水俣病のような公害を二度と起こさない環境を大切にしたいまちづくりに取り組むことを目的とした「環境モデル都市づくり」に着手しました。暮らしの中での「環境」、いわゆる水・ゴミ・食べ物等の基盤となる生命（いのち）を大切にすることが約束されています。

水俣市のゴミの分別種類の多さには、その約束が顕著に具現化されているといえるでしょう。1992年（平成4年）3月、中身が残った卓上ガスボンベがクリーンセンターの破砕処理施設に紛れ込んでしまったことにより、爆発事故が発生しました。このことをきっかけとして、1993年（平成5年）よりゴミの高度分別がスタートし、現在は燃やすゴミ1種類、資源ゴミ21種類の合計22種類のゴミ分別に取り組んでいます。

ここでは特に①資源ゴミの1つである廃食油の活用「エコネットみなまた」の取り組みとゼロ・ウェイストへの取り組みとして始まった②簡単！便利！きちんと使えば無臭！生ゴミ処理容器 キエーロについて詳しく紹介します。

①資源ゴミの1つである廃食油の活用「エコネットみなまた」の取り組み

エコネット水俣は水俣病患者の環境保護事業として生まれた廃食油リサイクル石鹼工場です。水俣市のゴミ分別によって回収された廃食油や賞味期限切れの食用油を用いて石鹼の製造を行っています。石鹼の販売を通して人々に「暮らしのあり方」を見直すことを提案し、合成洗剤の使用を減らすことを呼びかけています。

②簡単！便利！きちんと使えば無臭！生ゴミ処理容器「キエーロ」

水俣市はゼロ・ウェイストのまちづくりに向けた取り組みとして生ゴミの減量化を目指し、生ゴミ処理容器（キエーロ）の無償貸与を平成29年度より行っています。キエーロは、中に黒土が入っており、その中に生ゴミを投入すると土が生ゴミを分解してくれるという仕組みになっています。



キエーロを導入した家庭のメリットとしては収集日時を気にせずいつでも生ゴミが片付けられる点や、分解処理された生ゴミを園芸や庭先菜園の堆肥として利用できる点が挙げられています。また水俣市の統計によれば、キエーロの導入によって家庭ゴミの量は減少しているという結果も出ています。



生ゴミ処理容器「キエーロ」¹

以上に紹介した2つの事例は、水俣で起こった公害問題の歴史を鑑みた、水俣市ならではの実践として位置付けることができるでしょう。

文責：安齋麻友子

〈注〉

¹ 筆者撮影。



3-3 まとめ

本学では、図3-1「ごみ処理・リサイクルフロー図」のとおりごみの種別ごとに、最終処分先までのフローを把握しています。本プロジェクトで訪問した大崎町や水俣の事例からも示唆されているように分別がごみ処理に最も重要な最初の段階であるといえます。一方で、本学のごみ処理は業者に一任されており、学校運営において循環を生む取り組みがなされていないことも指摘されてよいでしょう。

しかし、本学のサークルやゼミで実施している優良な取り組みもあります。上記の現状で紹介したBrenda Bushell教授によるコンポストや河邊貴子教授による完全無農薬栽培の取り組みは学生を巻き込み、学内さらには地域と連携した活動の可能性を見出せるのではないのでしょうか。

以下に、事例を生かしつつ本学で取り組める活動を提案します。

1. 廃油からエコ石鹸づくり（学内の石鹸、商品化）
2. 食堂やカフェの廃棄物をコンポスト「キエーロ」で堆肥化（畑や植物の土壌に再利用）
3. ごみ排出量を教職員および学生が把握できるよう可視化
4. 学内の取り組みと地域とのつながりを作る（商店街とのコラボ企画など）

今回の視察は、地方における刷新的な取り組みを主として取り上げましたが、学内におけるサステイナブルキャンパス、そしてその先にある地域との連携を考える際、都市部におけるサステイナビリティ（アーバンサステイナビリティ）のあり方についても今後検討すべき課題として挙げられます。この視点は高等教育機関である大学が地域および社会づくりに貢献する新たな大学のあり方を構想する上でも重要であるといえるでしょう。

文責：神田和可子





4
運営

4-1 運営に関する聖心女子大学の現状

聖心女子大学では、「持続可能性」をテーマとした「教育」や「研究」といった面での取り組みが積極的に行われてきました。例えば、教育学科・永田佳之研究室ではこれまで「ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）」を実践的に学ぶスタディツアーが毎年実施されています。また、聖心女子大学の学生団体である「Earth in Mind」「はなはなSDGs」「SHOC project（ふくしまオーガニックコットンプロジェクト）」などの団体は、サステナビリティと関連した社会課題の解決を図るために、学内外でさまざまな活動を続けています。

2017年には、「聖心女子大学グローバル共生研究所」および「聖心グローバルプラザ」が開設されました。このように聖心女子大学では、持続可能で平和な世界の実現を目指して、これまで多様なテーマでシンポジウム、ワークショップ、展示など多彩な学びの機会が提供されてきました。

一方、キャンパスにおける温室効果ガスやプラスチックゴミの削減に対する、具体的な対策や数値目標の設定・評価など、「管理体制のマネジメント」の面においては、「持続可能性」の視点がまだまだ不足している点が課題となっています。学生団体のさまざまな取り組みを大学の運営体制に直接反映させることができるような仕組みづくりが今後いっそう求められているでしょう。

文責：木戸啓絵



4-2 事例紹介

(1) グリーンオフィスモデル

グリーンオフィス（Green Office以下、GO）とは、大学生が中心となってサステイナブルキャンパスを目指した動きを支える拠点として2010年オランダのマーストリヒト大学でスタートしました。その後、ヨーロッパ各地にGOモデルは広がり、現在では47の大学にGOが設置され、参加者（学生及びスタッフ）数は221名、プロジェクト数は542となっています。GOモデルを支えているのは、ESDのGAP（Global Action Program）パートナーでもあるrootAbilityという団体です。この団体は、2006年からグリーンインパクトというプログラムを実施してきたNUS（National Union of Students：イギリス学生組合）とチームを組んで、さまざまなサステイナブルな取り組みを支援してきました。こうした国際的な取り組みが高く評価され、2015年には「ユネスコ／日本ESD賞」を受賞しました。rootAbilityで活動するメンバーの多くが、20代から30代の若者が中心となっています。



2017年実施されたヨーロッパ・GOサミットの参加者たちの様子¹

例えば、自分たちの大学をもっとサステイナブルにしたいと考えた学生たちがいたとします。rootAbilityは彼らに、大学の運営部門との連携の仕方やプロジェクト推進などについて具体的なアドバイスを提供し、GOの立ち上げから支援します。GOは、「教育」「研究」「運営」の3つの観点で構成され、それぞれが連携を保ちつつ事業を進めていきます。なお、各GOの活動報告を元に、監査や評価の仕組みも整備されています。

GOが、従来の学生サークルなどと大きく異なる点は、大学側から資金提供を受けつつ、学生自身が自分の通う大学の運営に直接関与しているという点です。また、GOモデルでは、個々の大学内の取り組みに終始するのではなく、大学間での情報を共有することも特徴として挙げられていま

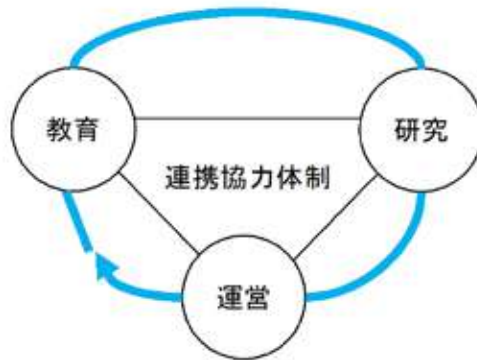


図4-1 グリーンオフィスの構成²

す。つまり、他大学との競争を意識してGOモデルを導入するという視点よりも、むしろ高等教育機関である大学が、「地球にやさしい環境づくり」や「持続可能な社会構築」にいかにかに寄与できるかという視点で取り組まれています。そのため、他大学の管理部門とも連携をとりながら、さまざまなプロジェクトを実施している点も重要な観点でしょう。



エラスムス・ロッテルダム大学の学生の様子³

文責：木戸啓絵

〈注〉

¹ rootAbilityのウェブサイトより[<http://rootability.com/green-offices/>] (2020年4月14日閲覧)

² Green Office Movementウェブサイト内動画で提示されている図を筆者翻訳[<https://www.greenofficemovement.org/>] (2020年4月14日閲覧)

³ Explore 23 Green Office case studiesウェブサイトより[<https://www.greenofficemovement.org/green-office-case-studies/>] (2020年4月14日閲覧)



困み記事

2

ヨーロッパ諸国の取り組み

ここでは、「4. 運営」で取り上げた「グリーンオフィスモデル（Green Office Model、以下、GOモデル）」がヨーロッパの大学でどのように取り組まれているか紹介します。GOモデルは、現在オランダ、ドイツ、ベルギー、イギリス、ベラルーシ、イタリア、スウェーデンなど多くの国々の大学で広まっています。なかでも、先進的な取り組みが注目されているオランダとドイツの事例を中心にみていくこととします。

(1) オランダ

世界で初めてGOが設立されたのは、オランダのマーストリヒト大学です（2010年）。2020年現在、オランダにはおよそ20の大学にGOが設けられています。比較的財政基盤が豊かな大学においてGOに、高額の予算が割り当てられています。例えば、マーストリヒト大学ではGO設立当初（2010年）の予算は75,000ユーロ（約900万円¹）、2015年には161,500ユーロ（約2,000万円）となっています。同大学のGOは、雇用された学生スタッフが8名（週14時間勤務）、環境コーディネーター1名（週20時間勤務）、博士課程の学生1名（週8時間勤務）のほか、大勢の学生ボランティアによって構成されています²。マーストリヒト大学のGO導入後の成果については、次のように示されています（表4-1参照）。

表4-1 マーストリヒト大学におけるGOの成果³

質的变化	量的変化
戦略的ガバナンスのフレームワークの構築	食堂でのオーガニックフードの取り扱いの増加 (5%→17%)
専門的能力の改善と環境的知識の深化	電気電子廃棄物のリサイクル率の増加 (+180%)
大学生の関与の増加 学生スタッフの協働の促進	技術的に可能な屋根部分への太陽電池の設置 (1%の電力消費量に相当)
	

(2) ドイツ

GOモデルは、オランダで考案されたものですが、GO運動は2014年にベルリンで開催された第1回ヨーロッパグリーンオフィスサミットで誕生しました。ドイツには、現在11大学にGOが設置されています（2020年）。オランダのGOと比較するとやや小規模な傾向があるようです。例えば、ヒルデスハイム大学のGOは、雇用された学生スタッフ6名（週5時間勤務）、研究助手1名（週40時間勤務）、複数の学生ボランティアスタッフで構成されています。財政的には、100,000ユーロ（約1,200万円）の援助を受けて活動しています。

また、ドイツではGOを設置していない大学においても、大学独自のサステイナブルセンターを設置し、大学における「研究」「教育」「運営」に持続可能性の観点を積極的に取り入れる動きも見られます⁴。このように、ドイツにおいては持続可能性を強く意識した街づくりや大学構想が進められています。

文責：木戸啓絵

〈注〉

¹ ユーロ120円として換算

² 2017年のウェブセミナー資料に基づいた運営状況です。なお、2020年現在は、2019年からGOの体制が新しくなり6名の雇用された学生が週8時間勤務しているようです。

³ 2017年5月10日実施のウェブセミナー資料をもとに筆者作成。

Introduction to the Green Office Model - Webinar 10 May 2017 [<https://www.youtube.com/watch?v=026pkqsisbM>]（2020年4月14日閲覧）

⁴ 例えば、ハンブルク大学のサステイナブルセンター（独語：Kompetenzzentrum Nachhaltige Universität 英訳：Center for a Sustainable University）は2011年に創設されて以降、多くのプロジェクトが遂行され、報告書がウェブ上で公開されています。

(2) Operation Green (オペレーション・グリーン)

一般社団法人Earth Companyは2014年に設立され、「次の世代に残せる未来」のために、社会変革を起こす「人」と「団体」を支援・育成しています。インドネシアのバリ島に拠点を置き、①IMPACT HERO支援事業、②バリ島ソーシャル研修事業、③コンサルティング事業の3つの事業を展開しています。さらに、2019年にはバリ島でエコホテルの運営を開始し、人と自然が共存した心地よい環境を提供しています。食からエネルギーに至るあらゆる面で環境に配慮した空間を創り、社会課題の解決を自然体に生命の根幹から実現する活動を行っています。

現在Earth Companyでは、Operation Green (オペレーション・グリーン) という取り組みを企業中心に行っており、今後は企業のみならず行政や学校などの組織においても取り組みを始めるそうです。Operation Green (オペレーション・グリーン) とは、企業や学校、非営利団体などの組織がより環境に配慮した運営を行うための道筋をエコ施策や事例をまとめることで組織のエコ化を支援していく取り組みです。

組織のエコ化を図る上での具体的な取り組み内容は、以下の図に示されているような領域が提示されています。

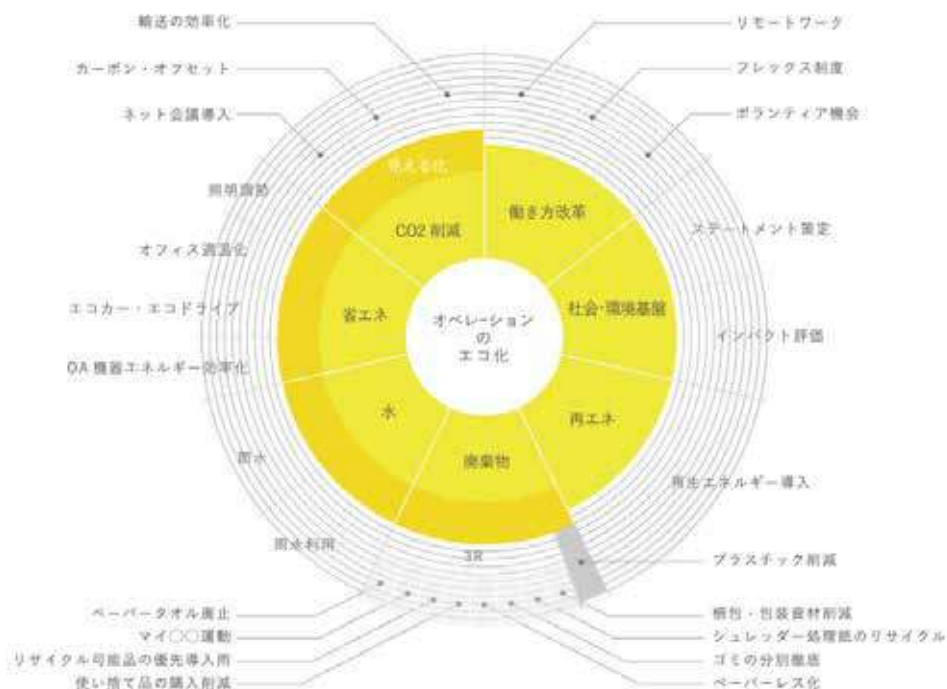


図4-2 エコ施策マップ¹

7つのカテゴリー（CO₂削減、省エネ、水、廃棄物、再エネ、社会環境基盤、働き方）に分類し、さらに各カテゴリーごとに取り組める具体的なアクションについて整理したものです。

文責：神田和可子

〈注〉

¹ Operation Greenのホームページ [<https://operationgreen.info/>]（2020年3月20日閲覧）



(3) 千葉大学

千葉大学は環境マネジメントシステムの国際規格であるISO14001とISO50001を取得しています。環境ISO学生委員会は発足以来、環境・エネルギーマネジメントシステムの運営を担っている組織です¹。以下からは、学生の巻き込み方と環境ISO学生委員会の取り組みを例示します。

①学生の巻き込み方

環境ISO学生委員会の活動は一般教養科目として単位化されます²。また、3年間学生委員会の活動を行うと、「千葉大学環境エネルギーマネジメント実務士」という学内資格が学長より贈られます³。

②取り組み

環境ISO学生委員会の活動は大きく分けて5つあります。第1に、省エネ・省資源やごみの分別・リサイクル、グリーン購入などを促進する活動です⁴。具体的には、省エネ啓発のイベント開催や啓発ポスター等の作成、裏紙利用促進、汚ごみ分別のパネル作成などがあげられます⁵。第2に、地域社会や民間企業を協働しています。地域で開催される環境関連のイベントへの参加や、三菱製紙販売株式会社との間伐材シャープペンシルの製作を行っているのです。第3に、附属小中学校の児童・生徒と環境活動を行ったり、附属幼稚園でのイベントを開催したりもしています⁶。第4に、エネルギーマネジメントシステムの構築・運用を担当しています⁷。環境マネジメントマニュアルの改訂や企画の発案と実行、内部監査や記録、学生や教職員対象の基礎研修、環境報告書作成など多岐にわたって活動しています。最後に、生協でのレジ袋を有料化し、得た収入を生協から拠出してもらい、オリジナルのエコグッズを製作して販売したりしています⁸。

最後に、千葉大学の環境ISO学生委員会の特徴として、単位や資格取得によって学生が参加しやすくなる仕組みをトップダウンで整備している点、学生が主体的に多様な活動を行っている点があげられます。

文責：本川絢子



〈注〉

¹ 千葉大学環境ISO学生委員会（2019）『2019年度版ガイドブック』, p.3

² 千葉大学環境ISO学生委員会「千葉大学の学生主体による環境マネジメントシステムの仕組みと効果」（2019年12月訪問時配布資料）

³ 同上

⁴ 千葉大学環境ISO学生委員会「千葉大学の学生主体による環境マネジメントシステムの仕組みと効果」（2019年12月訪問時配布資料）

⁵ 同上

⁶ 同上

⁷ 同上

⁸ 同上



(4) ダイベストメントの提案

ダイベストメントとは、石炭火力発電開発事業をはじめとした、気候変動の促進に繋がる事業に融資をしている銀行から預金を引き上げて、事業に融資をしていない銀行に口座を移す行為のことを指します¹。

この運動は、2011年にアメリカの大学に通う大学生が、大学の資金が鉱業会社に投資され、大学が自然環境や若者の未来を破壊する行為に加担していることを知ったことを機に、始まりました。その後この動きは、2008年から国際的にダイベストメントの啓発を行っている国際NGO350.orgによって、欧米のみならず日本など東アジア地域においても、活動の輪が広がりました。

昨年スペイン・マドリードで開催されたCOP25において、ドイツとオランダの環境NGOが2016年～2019年にかけて行った、石炭産業に投融資する世界の金融機関に関する調査報告書を発表しました。その報告書によると、日本の民間銀行大手3社による石炭火力発電事業への融資額が、突出して上位を占める結果となりました（図4-3）。



図4-3 石炭火力発電への融資銀行世界ランキング²

今や世界では、教育機関やカトリックをはじめとした宗教団体など、組織によるダイベストメントの動きは主流となってきています。教育機関では欧州の大学を中心に、176校の世界の大学がダイベストメントを表明しています。

表4-1 国別ダイベストメント表明大学³

ヨーロッパ 10606校 (例：オックスフォード大学など)	
イギリス	88校
スウェーデン	5校
ベルギー	5校
アイルランド	3校
ドイツ	2校
デンマーク	1校
ノルウェー	1校
イタリア	1校
オセアニア 12校 (例：オーストラリア国立大学など)	
オーストラリア	6校
ニュージーランド	5校
マーシャル諸島	1校
その他の国 (例：スタンフォード大学、マギル大学など)	
アメリカ	49校
カナダ	9校

特に2014年にイギリスで初めてダイベストメントを表明したグラスゴー大学は、2025年までに大学のエネルギーである石油・ガスの保有量を10%から0%に削減するという、意思表明に伴った具体的な行動目標も掲げています。大学の保有量は2019年4月時点で、約5.5%まで削減されています⁴。このような行動は他大学にも注目され、グラスゴー大学に続きシェフィールド大学、エディンバラ大学などもダイベストメントを表明し、現在イギリスの約50%の大学が脱化石燃料に取り組んでいます。これらの大きな変化の波は、気候変動への危機感を胸に行動する学生の声によって起こされたとも言われています。

日本ではまだ、教育機関としてダイベストメントを表明した大学はありません。しかし先日4月14日に、石炭火力発電所への最大融資銀行であるみずほ銀行が、2050年までに発電所への新規融資を停止するという発表を行いました⁵。度々世界から批判を浴び続けていた日本のメガバンクでさ



えも、今や重い腰を上げて行動する時を迎えています。これを好機と捉えるかどうかは大学自身です。350.org Japanは、2018年に行った金融機関を対象としたアンケート結果をもとに、「地球に優しい銀行（Cool Bank）ランキング」を発表しています。口座を移す第一歩、ぜひ検討をしてみてくださいはいかがでしょうか。

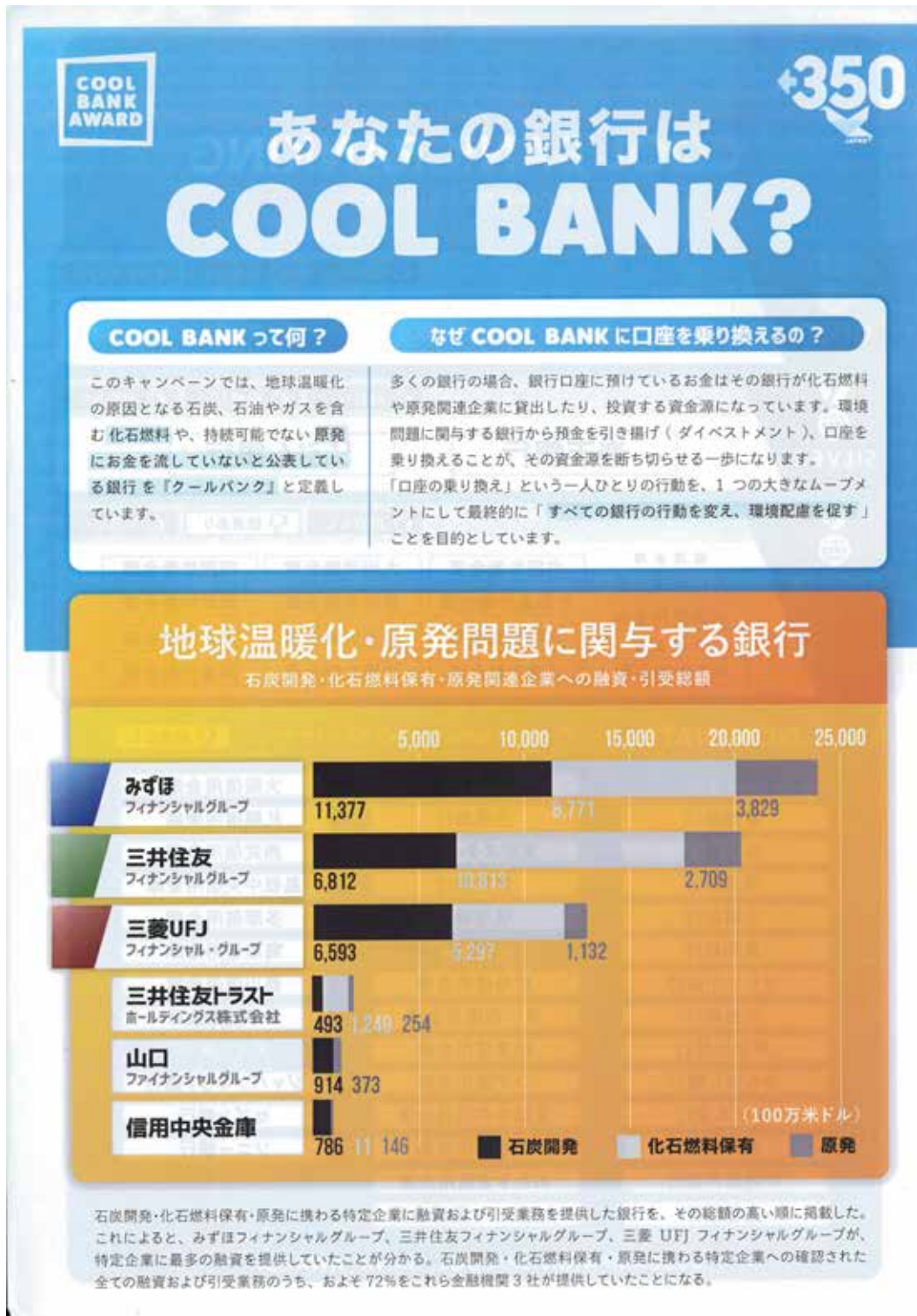
文責：岡田英里

〈注〉

- ¹ 永田佳之 2019 『気候変動の時代を生きる：持続可能な未来へと導く教育フロンティア』 山川出版社 p.76
- ² 350.org Japan ホームページ [<https://world.350.org/ja/press-release/191205/>]（2020年3月20日閲覧）
- ³ fossil free: divestment [<https://gofossilfree.org/divestment/commitments/>]（2020年4月15日閲覧）
- ⁴ Glasgow Guardian [<https://glasgowguardian.co.uk/2019/09/04/university-of-glasgow-ahead-of-schedule-in-its-plan-to-divest-fully-from-fossil-fuels/>]（2020年4月14日閲覧）
- ⁵ 日経新聞、2020年4月14日 [<https://r.nikkei.com/article/DGXMZO58039820U0A410C2MM8000>]



資料：『あなたの銀行はCOOL BANK?』¹



COOL BANK RANKING
化石燃料・原発を支援しない銀行

GOLD 融資なし 投資なし 公表あり

SILVER 融資なし 投資なし 回答あり

BRONZE 融資なし 投資あり 回答あり

NOMINATE おそらく融資なし おそらく投資なし 回答なし

信用金庫	中国労働金庫	九州労働金庫	四国労働金庫
旭川信用金庫	北海道労働金庫	長野労働金庫	静岡労働金庫
秋田信用金庫	北陸労働金庫	新潟労働金庫	東北労働金庫
労働金庫	中央労働金庫	近畿労働金庫	沖縄労働金庫
東海労働金庫			

地方銀行	静岡中央銀行	大阪信用金庫
愛媛銀行	但馬銀行	札幌信用金庫
福邦銀行	東京スター銀行	西武信用金庫
福島銀行	東和銀行	島根中央信用金庫
北越銀行	筑波銀行	多摩信用金庫
豊和銀行	信用金庫	鳥取信用金庫
きらやか銀行	尼崎信用金庫	豊川信用金庫
仙台銀行	青い森信用金庫	米子信用金庫
神奈川銀行	城南信用金庫	ネット銀行
さらぼし銀行	コザ信用金庫	ジャパンネット銀行
北日本銀行	京都中央信用金庫	セブン銀行
長野銀行	京都信用金庫	ソニー銀行
沖縄海邦銀行	おかやま信用金庫	
島根銀行	大阪シティ信用金庫	

350CAMPAIGN.JP/COOL_BANK_AWARD/

〈注〉

¹ 350.org Japan 2018年9月10日Cool Bank Report 調査発表イベント「ESGの最前線：脱炭素化」配布資料。

4-3 まとめ

これまで、国内外のサステイナブルな大学運営に関する様々な事例を紹介してきました。国際的に、サステイナブル・キャンパスの取り組みは昨今本格的に行われるようになったため、本学も様々な課題を認識した上で、これから本腰を入れて実践していく時期なのではないかと思います。そのため、本学のサークルEarth in Mindなどの学生団体と教職員が協働することで、聖心ならではの以下の5つのような持続可能な大学運営を行うことができるのではないかと考えます。

1. 日本にあるカトリックの大学としての、ダイベストメントの実施
2. 学内関係者や一般の方にダイベストメントの啓蒙活動をする
3. 個人の銀行口座としてクールバンク¹を選択してもらう
4. これまでの資金援助を継続しながら、学生自身がサステイナブルな大学にするための運営の意思決定に関わる運営体制への改善
5. サステイナブルな組織への道筋を具体的な施策を用いて網羅的に示している「エコ施策マップ」(p.35)に基づき、聖心女子大学の現状を把握する

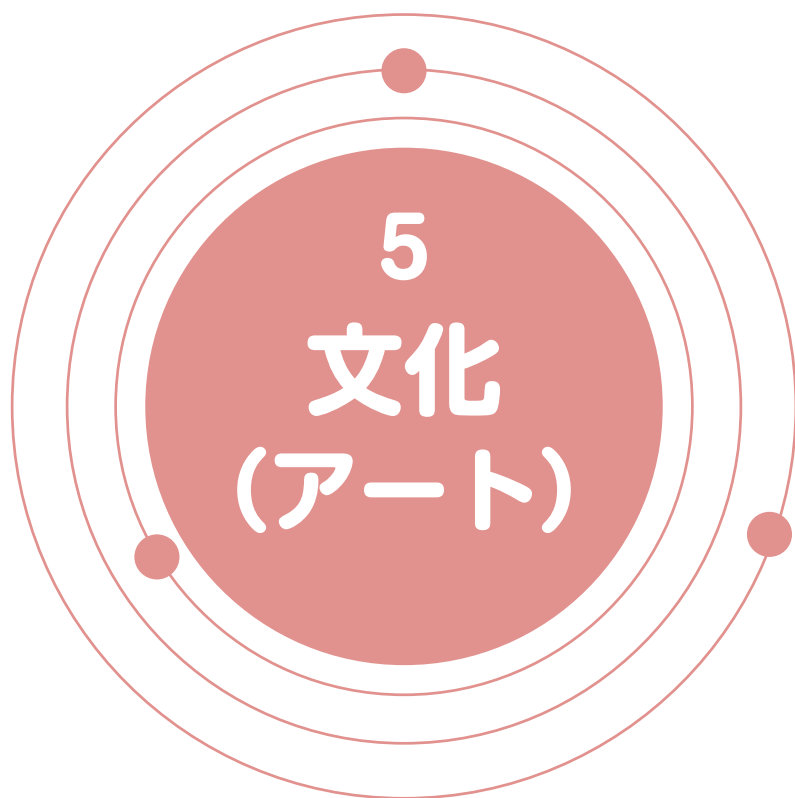
真の聖心の姿を深く理解しているのは、学生生活を送っている学生自身です。上記をもとに、学生が主体となって自身の大学を持続可能なものにデザインしていく機会を作っていくのはいかがでしょうか。

文責：岡田英里

〈注〉

¹ 化石燃料開発事業や原発関連事業を支援していない銀行のことを指します。





5-1 サステナブル・キャンパスに向けた田窪恭治先生によるPBL (特別講義&ワークショップ) プロジェクト

海外の高等教育機関がサステナブル・キャンパス創りに取り組む際、通例、意識されるのは「3つのC」(Curriculum, Campus, Community)です。

しかし、本プロジェクトは、持続可能な社会をつくるのは健全な環境・社会・経済の3本柱のみならず、それらの基層にある文化が重視されなくてはならないというユネスコの提言にならい、「文化」を統合的に組み込むこと、すなわち「4つめのC」としてCulture(文化)に焦点を当てたPBLを実践しました。

「国連ESDの10年」と後継のグローバル・アクション・プログラムが国際的に展開された15周年間、持続可能な社会形成に資する優良な各国の教育実践をユネスコ本部で評価する立場にあった筆者の知見からしても、4つめのCを前面に出したPBLは国内外にかかわらずユニークな試みであると言えます。

講師として、4号館の「黄金の林檎」の作者でありグローバル共生研究所の招聘研究員でもある田窪恭治先生をお招きし、3日間にわたって参加型の講義とワークショップが行われました。学生たちは今回の制作にかかわる美術史を学んだ後、キャンパスを実際に歩いて「変えたい!」と思った場所を写真に撮り、それを造形室に持ち帰って講義で得た知識を活用しながら水島尚喜先生のご指導のもとにコラージュ的な作品を創りました。さらに「夢のキャンパス」に関する提案を仲間と共有していくというプレゼンテーション(写真)は学生にも教員にも新たな「気づき」をもたらし、希望に満たされた時間となりました。

参加者は、学部生10名、大学院生4名の計14名です。以下に3日間の概要を示した後、学生達の作品ならびに学生たちの意見に傾聴しつつ構想された田窪先生ご自身による作品も紹介します。





田窪恭治先生による歴史的作品に関する講義



PBL最終日のデジタルを駆使したプレゼンテーション



PBL最終日の紙媒体によるプレゼンテーション

文責：永田佳之



5-2 特別講義&ワークショップの概要

●第1回 美術史の講義とキャンパス散策（撮影）

日時：2019年11月3日（日）10：30-16：00

場所：造形室

内容：

- ・田窪先生による美術史の講義
- ・大学内散策し、再デザインしたい場所の選定
- ・現状のスケッチ

成果：

美術界を牽引されてきた田窪先生の講義は、人間が芸術と触れ合うことの意味を改めて考える機会となった。また学内散策は普段さしたる目的意識を持たずに学内を歩く学生にとってキャンパスの新たな一面を発見することになり、「当たり前」を捉え直す姿勢が多く見られた。

●第2回 作品制作

日時：2019年11月23日（土）10：30-16：00

場所：造形室

内容：

- ・田窪先生による美術史に関する講義
- ・水島先生による「アンブレラ・プロジェクト」クリスト&ジャンヌ=クロードの紹介
- ・各々が選定した場所の再デザインをスケッチ
- ・再デザイン提案に向けたパネル作品の制作

成果：

水島先生の講義から芸術には多種多様なカタチがあることを学び、自由に発想することへの安心感を得た。また大学の講義ではあまり使わない想像力を必要とする作業に、とてもいきいきと取り組む姿が見受けられた。



●第3回 作品制作とシェアリング

日時：2019年12月7日（土）10：30－16：00

場所：造形室

内容：

- ・再デザイン提案に向けたパネル作品の制作
- ・パネル作品のプレゼンテーションを通じたアイデアの共有

成果：

自分のアイデアに自信をもって発表する姿から、「自分でも何か変化が起こせそうだ」という感覚を体得しつつある様子が見られた。また複数人が同じ場所の「再生」のデザインに取り組むことになったために不安を抱いていた学生も、全く異なるアイデアが生まれたことをおもしろいと前向きに捉える姿勢に変容していった。

※次ページから掲載の学生による作品の解説は57－58頁にあります。

文責：安齋麻友子



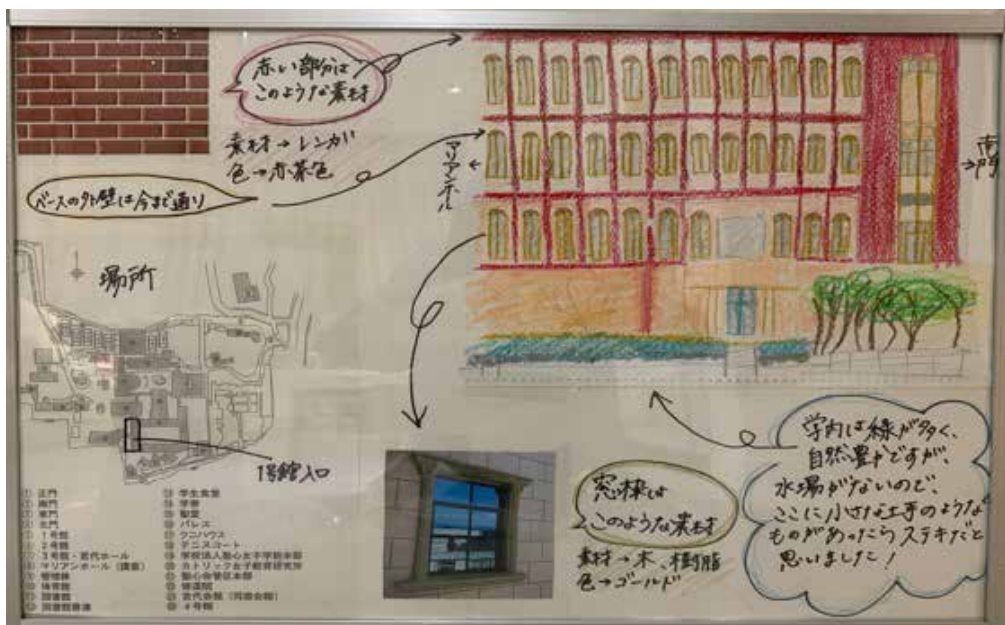
(3) 『日常の“やすらぎ”』³

安藤穂乃佳 (教育学科3年)

(4) 『結 (ゆい) —自然が人と時間を繋ぐ』⁴

池田光嶺 (教育学科3年)

(5) 『自然と調和する』⁵



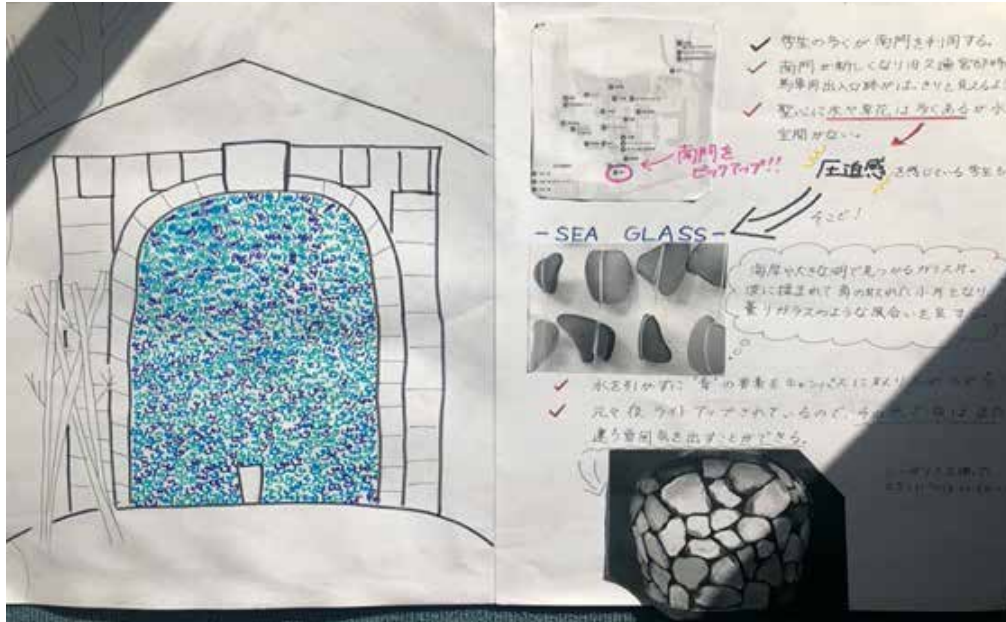
大谷絵美 (教育学科3年)

(6) 『心のサステナビリティ』⁶

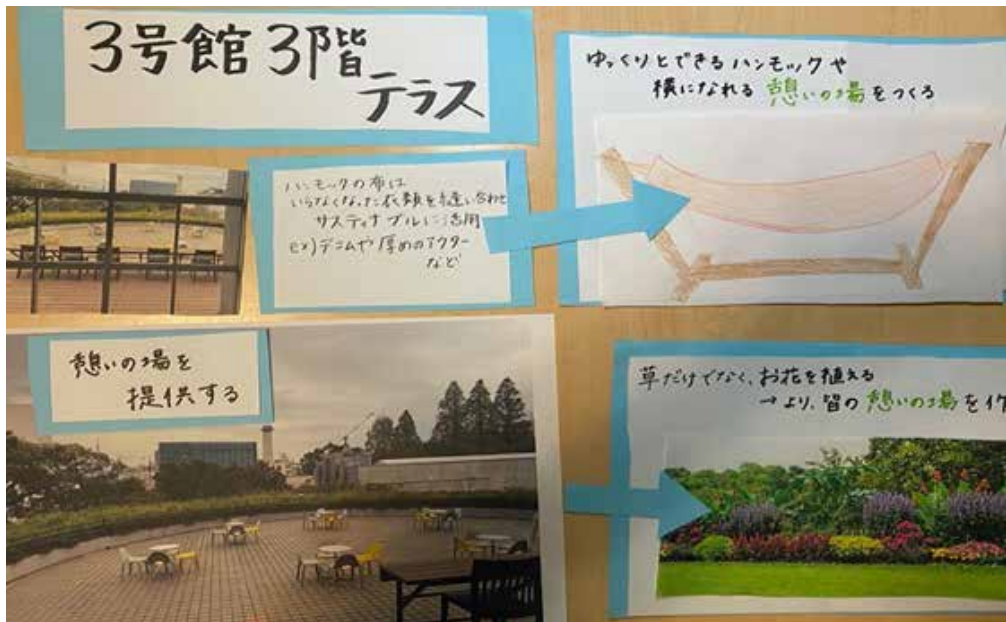


岡田英里 (国際交流学科4年)



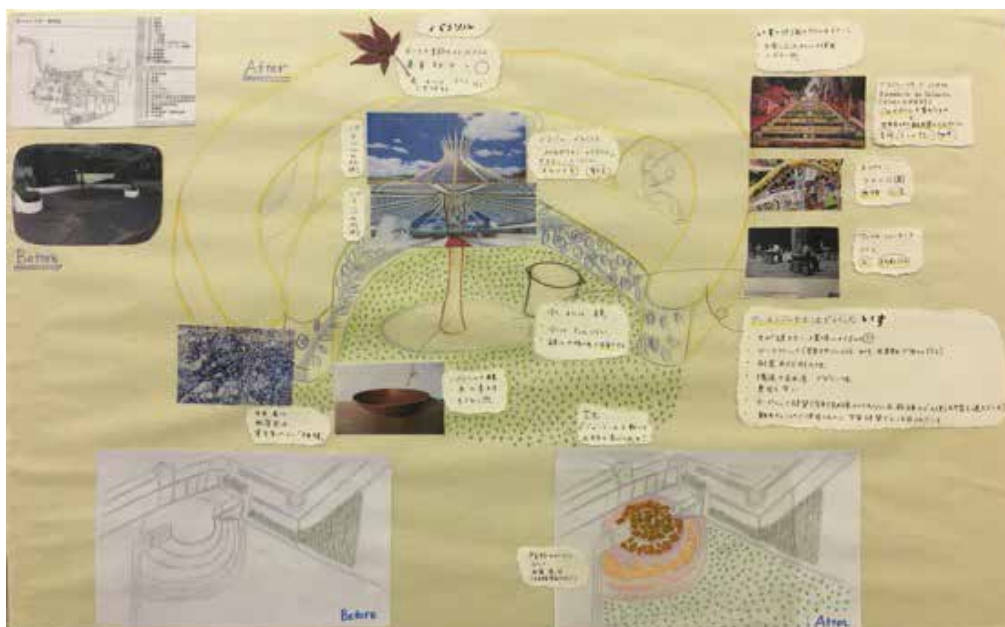
(7) 『サステナビリティの始まり』⁷

岡村万智子 (教育学科3年)

(8) 『サステナブルな憩いの場を』⁸

加藤春菜 (教育学科3年)

(9) 『深遠な知の世界へ』⁹



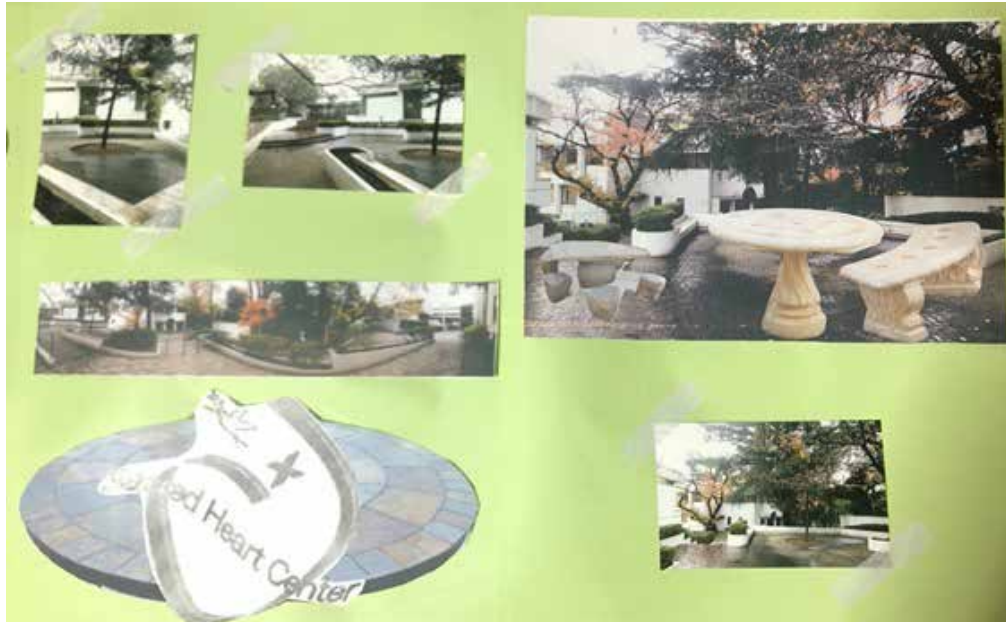
神田和可子（人間科学専攻博士後課程1年）

(10) 『The South Square』¹⁰



後藤田由紀（教育学科3年）



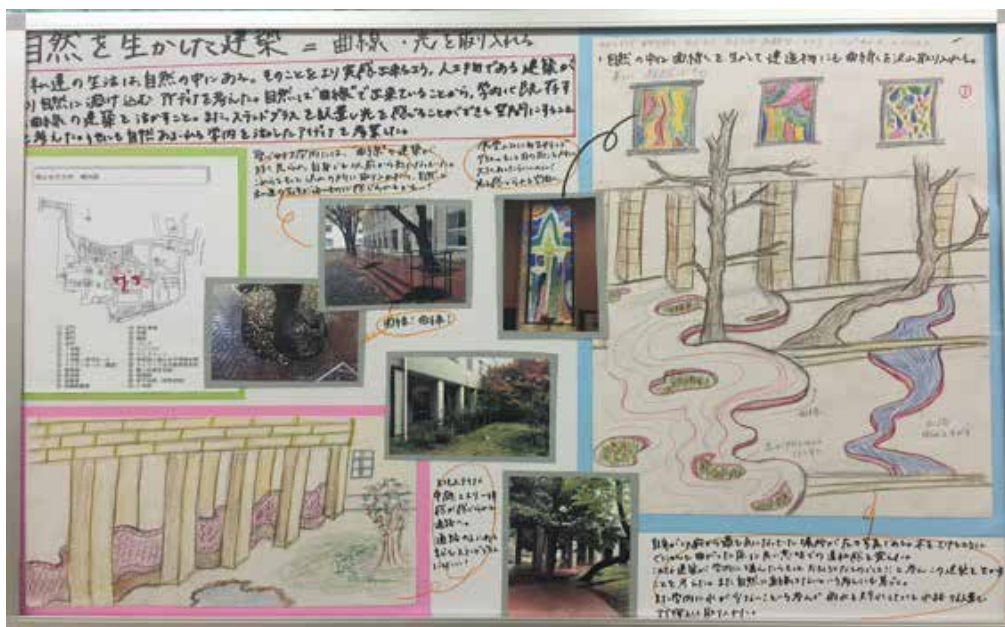
(11) 『リラックス場』¹¹

スモン・ピソン (人間科学専攻博士後期課程1年)

(12) 『ノスタルジック・キャンプ』¹²

本川絢子 (人間科学専攻博士前期課程1年)

(13) 『建造物と自然の一体化』¹³



向井真里（教育学科4年）



〈注〉 作品の説明

- ¹ 『心地よく時を感じられる場』：聖心女子大学は歴史があり、大学内に残るたくさんの古き良きものを五感で楽しめるキャンパスです。建築や古い建物の質感、大木に囲まれ刺激を受けながら学べることはどれだけ贅沢で、有意義だろうかと感じています。上へ上へと新しい高層・近代化する大学は多々ありますが、古き良きものを活かしながら、ディスプレイを新しく心地よいものに変化させるのが、聖心女子大学らしいと考えます。
- ² 『4号館への道、サステナビリティへの道』：本キャンパスから北門を抜けて4号館へ向かう途中に坂道があります。コンクリート地面の坂道は照り返しが強く、上りも下りもどちらもしんどい道です。そんな坂道を少しでも楽しめるような道、またサステナブルな取り組みにつながるような坂道をデザインしました。
- ³ 『日常の“やすらぎ”』：学生食堂の2階は天窓から日差しが差しているので、日中は電気を使用しなくても明るい素敵な場所です。しかし、2階ということで天井との高さが1階に比べるとだいぶ低く、窮屈に感じる場所でもあります。そのため、天井をより高く感じられるように、地面に近い形式のテントやハンモックの使用を考えました。
- ⁴ 『結（ゆい）—自然が人と時間を繋ぐ』：学生で賑わう食堂ですが、1人で利用している学生の多くが端の席に座っている光景に疑問を抱いていました。直線で区切られた空間が、物理的にも心理的にも“境”を作っているのではないかと感じ、聖心の豊かな自然が誰もかもを包み込み、皆が居心地良い食堂に変われば良いと思い企画しました。
- ⁵ 『自然と調和する』：1号館入口の建物に色が無いと感じたので、赤いレンガとゴールドの窓枠をつけることを考えました。また、水場がないので入口付近に小さな土手を作りたいと考えました。
- ⁶ 『心のサステナビリティ』：このアイディアは、時間や課題に追われて忙しい日々を過ごす学生を見て、時の流れが緩やかな、心休まる空間を学内に作りたいという思いから生まれました。学寮の横にある芝生の空き地を活用して、靴を脱いで寝そべったり、ぼーっとしたり、水辺で自然を感じる場所を作り、深呼吸をして心に余裕を作ることができる場所にしたいと思います。
- ⁷ 『サステナビリティの始まり』：私は南門の左側にある壁にシーガラスを貼り付けるアートを考えました。聖心キャンパス内に緑の要素は多く、またそこから圧迫感を感じる学生も多いので「青」の要素をエントランスに入れることで水を連想させ「リラックス」や「心地よさ」を取り入れることができるのではと考えています。また、もともと夜になるとライトアップされている場所なので夜になるとまた違う雰囲気にも変われることもできると思います。

- ⁸ 『サステイナブルな憩いの場を』：より皆の憩いの場となるように工夫を凝らしました。①お花を植えることで、色を加え気持ちが穏やかになるようにし、②ハンモックを置き、安らげる空間を作りました。そのハンモックは、リサイクル品を継ぎ足して丈夫なものとしてサステイナブルに利用したいと考えます。
- ⁹ 『深遠な知の世界へ』：図書館へつづくこの空間は季節の移り変わりを感じながら学びを深められる場所です。環境負荷の小さなアースバック工法で作られたベンチはみなで制作過程を楽しみながら作り上げていくことができます。好奇心が刺激されるようなお気に入りの場所になるでしょう！
- ¹⁰ 『The South Square』：図書館前スペースは来校者の多くが通り、聖心の第一印象を決めると言っても過言ではありません。明るく開放的な場に改善し、ランチタイムには商店街飲食店の弁当販売を許可するなどして、食堂の混雑緩和に繋げるのも良いと思いました。
- ¹¹ 『リラックス場』：図書館の前のスペースに机や椅子を置いて学生たちはゆっくり暮らすのできる場所を作りたいです。
- ¹² 『ノスタルジック・キャンプ』：私を変えたいと考えた場所は、1号館の中心にある中庭です。この場所は小さいながらも自然に囲まれており、学生や教職員の憩いの場となる可能性をもっています。そのため、より自然のなかでゆったり過ごしやすくするために、この中庭を小さなキャンプ場へと変えたいと思います。自然にあふれたこの場が皆をリラックスさせ、人間どうしのつながりを生み、本学を心地よい居場所となるよう願っています。
- ¹³ 『建造物と自然の一体化』：聖心女子大学キャンパス内には自然が沢山あります。その美しい自然と建物を一体化するために、建物の中に曲線を増やす建築に変えることを考えました。そうすることで、キャンパスで過ごす人々の心も豊かになるのではないのでしょうか。



5-4 田窪先生による講義・ワークショップの記録

1.

—2019年度教育改革等推進プロジェクト—

実施日 2019年11月30日(日)・11月23日(土)12月7日(土)

午前 10:30 ~ 午後 17:00

持続可能な未来の創り手育成に向けたPBL
(プロジェクト・ベースド・ラーニング)の推進授業
における田窪恭治(美術家)(聖心女子大学グローバル共
生研究所招聘研究員)の授業。

タイトル 『風景芸術』**授業テーマ** 大学キャンパスを自己表現する!

学生が毎日通う東京・広尾の聖心女子大学の建
物内部・外部及び庭やオープンスペースを各観察し、
各自“気になる場所”を特定し、今まで以上に
活性化できる現場を想像し、さらに独自の
デザインによるイメージを表現するための試
行錯誤を行う。

授業内容 1回目 11月30日(日)

- ① 授業の概要を永田佳之教授より学生に説明。
- ② 田窪恭治(美術家)より今回の授業のテーマと
目的の説明

「4号館・グローバルプラザロビー」に制作した『黄金の林檎』

2.

モザイク壁画の話からギリシア・ローマやビザンチン時代の神話や宗教をテーマにした美術(パブリックアート)の話から現代のアントニオ・ガウディによるスペイン・バルセロナにあるグエレ公園などの作品を紹介しながら、聖心女子大学のキャンパスを各自の表現の対象としてどうえ、どのように新しいイメージを視覚化するか? について、まずキャンパス内を観察する事から授業を始める。

③水島尚喜教授からラスコーヤシュョーバーの洞窟壁画などの話をしながらパブリックアートの話があり、クリスト(美術家)のアンブレラ計画のドキュメンタリー映像が上映された。

2回目 11月23日(土)

- ①学生の作業を継続するなかで永田、水島、田窪が1人1人のアドバイスをしながら、
- ②水島教授からパブリックアートの話を田窪に質問された田窪は、まず現代のパブリックについて今道友信(美学者)さんや宇沢弘文という考え方

3

- ② (経済学者) 佐川の「公共」という考えを例に出して説明しながら 1986年に亡くなったジョセフ・ボイス (独・美術家) による「社会芸術」という話をする。【芸術と政治をめぐる対話, ボイス+エニツ】
- ③ 永田教授からサステイナブル (持続可能) での多様な生物が共存するなかでの人間の役割について、市民と一緒に社会課題に取り組む芸術表現を究極するプロジェクト? の例が話(新しい)すれ、ドキュメント映像を提示された。SEA (ソ・ヤリ・エニツト・アート)?

3 回目 12月7日(土)

- ① 学生が、それぞれの表現の対象とした場所以てどのような形で、どのように視覚化、説明できるのか? スケッチブックに採集したスマートフォン映像などにより対行錯誤する姿をみる。田窪から、水島教授が制作した、クリストの「アンブレラ計画」についての独自に制作した「プレゼンテーション」を参考に学生各自のイメージを「プレゼンテーションボード」にして制作する事を提案し、宿題とする。

4.

- ②“プレゼンテーションポスター”の制作について具体的な説明が水島教授から話される。
 - ③今後の授業の“まとめ”や予定について永田教授より授業のしめくくりの話がある。
- ※この授業については2019年度教育改革等推進プロジェクトの一環として2020年5月に報告書が作成される予定である。

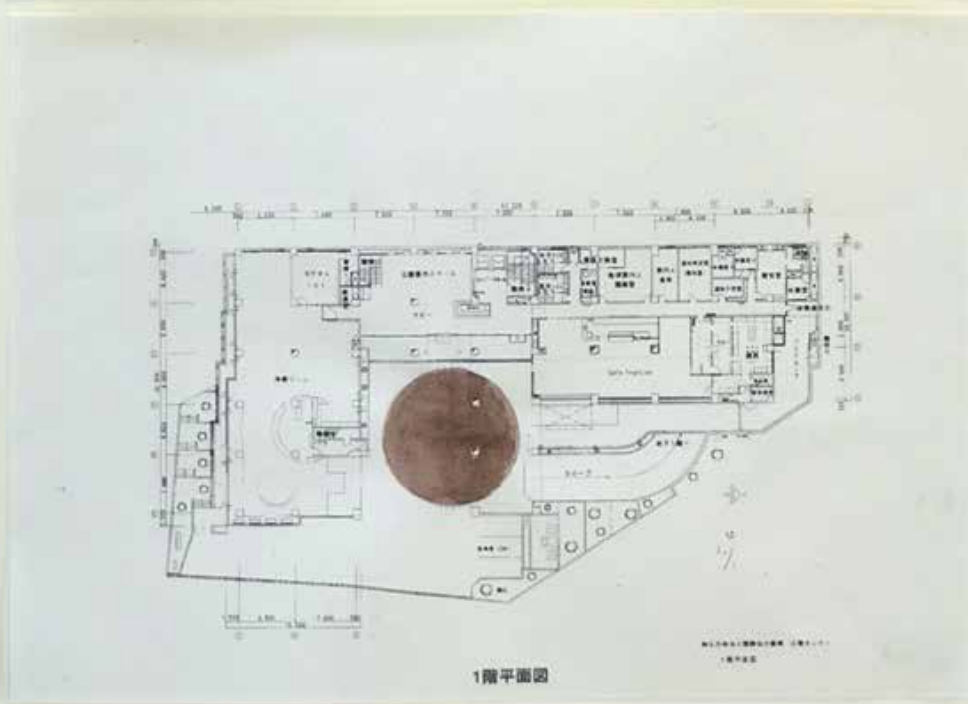


5-5 田窪先生によるイメージプラン¹

〈注〉

¹ この「イメージプラン」は、PBLの講義及びワークショップの中で聴かれた学生たちの声を参考に田窪恭治先生によって創られたものです。

A-1 CORQ®広場



CORQ®とは10cm×10cm×2.5cmの特種な鉄、コルテン銅による鋳物のブロックです。

A-2 CORQ®広場



CORQ®広場は4号館グローバルプラザの「黄金の林檎（モザイク壁画）」から始まります。「黄金の林檎」の足元に敷かれたCORQ®がエントランススペースへと広がります。

CORQ®広場のイメージです。

実際は真ん中の木が無く大きな円形のスペースがステージとなり、その上でコンサートやさまざまなイベントが開催されます。



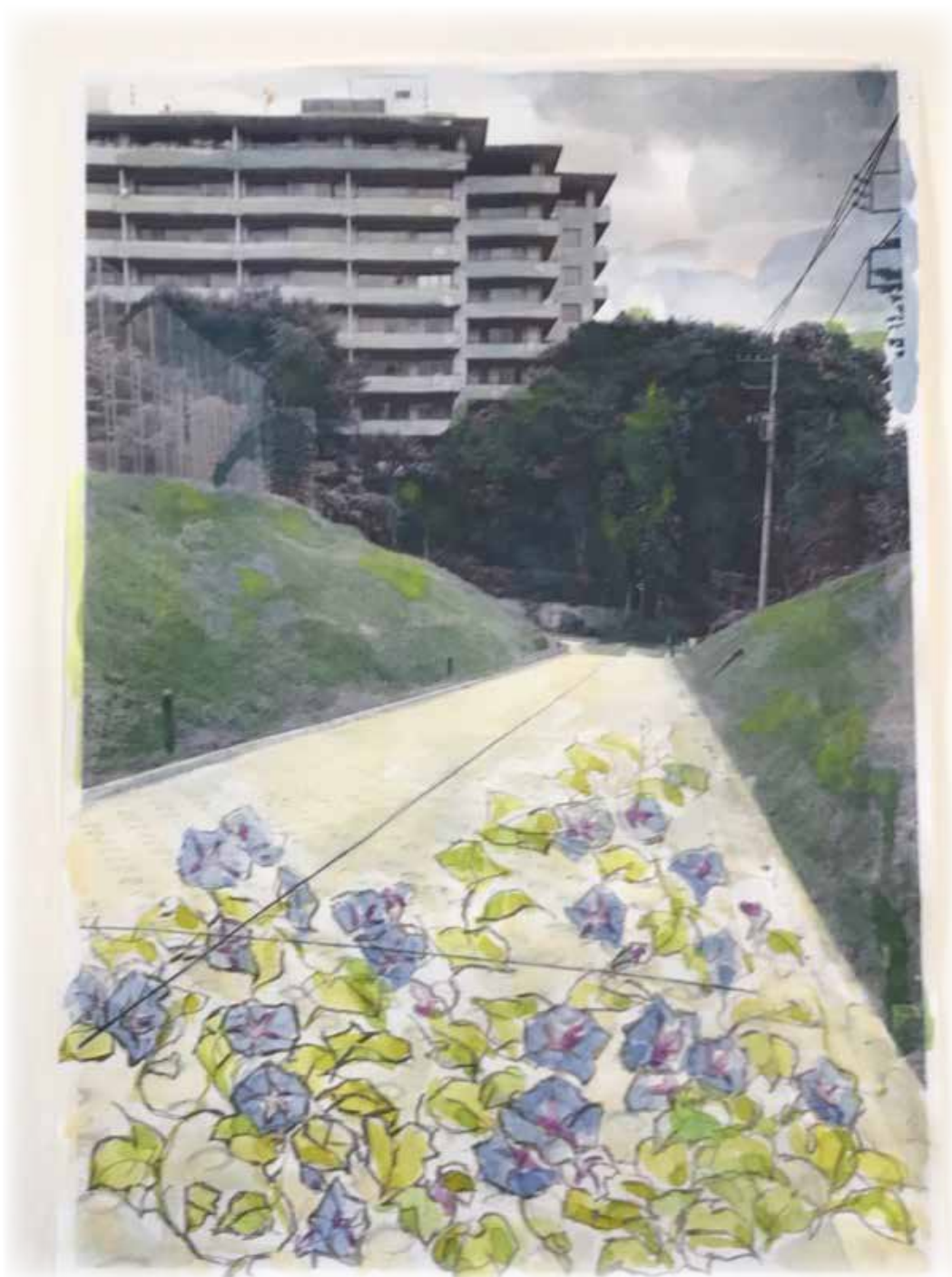
CORQ®広場は学生や子供達と一緒に作る広場です。東日本大震災後の復興支援プロジェクトでBASFとユネスコの協力のもと聖心女子大学の学生と教員、地元の小学生達とつくりました。



陸前高田市仮説図書館ふらっと広場

B-1 アサガオの道

コンクリートの坂道にアサガオの陶板画を設置し清々しいイメージを演出します。



B-2 アサガオの道



新しく設置された北門にはアサガオが咲きます。

現在の北門から校内に入る坂道はコンクリートで冷たいイメージです。



アサガオのイメージを陶版画にします。

C-1 学 寮



カエデのイメージ



桜のイメージ

現在の学寮はハードなイメージなので「カエデ」と「桜」のモザイク画を取り付ける。



C-2 学生食堂オリーブ



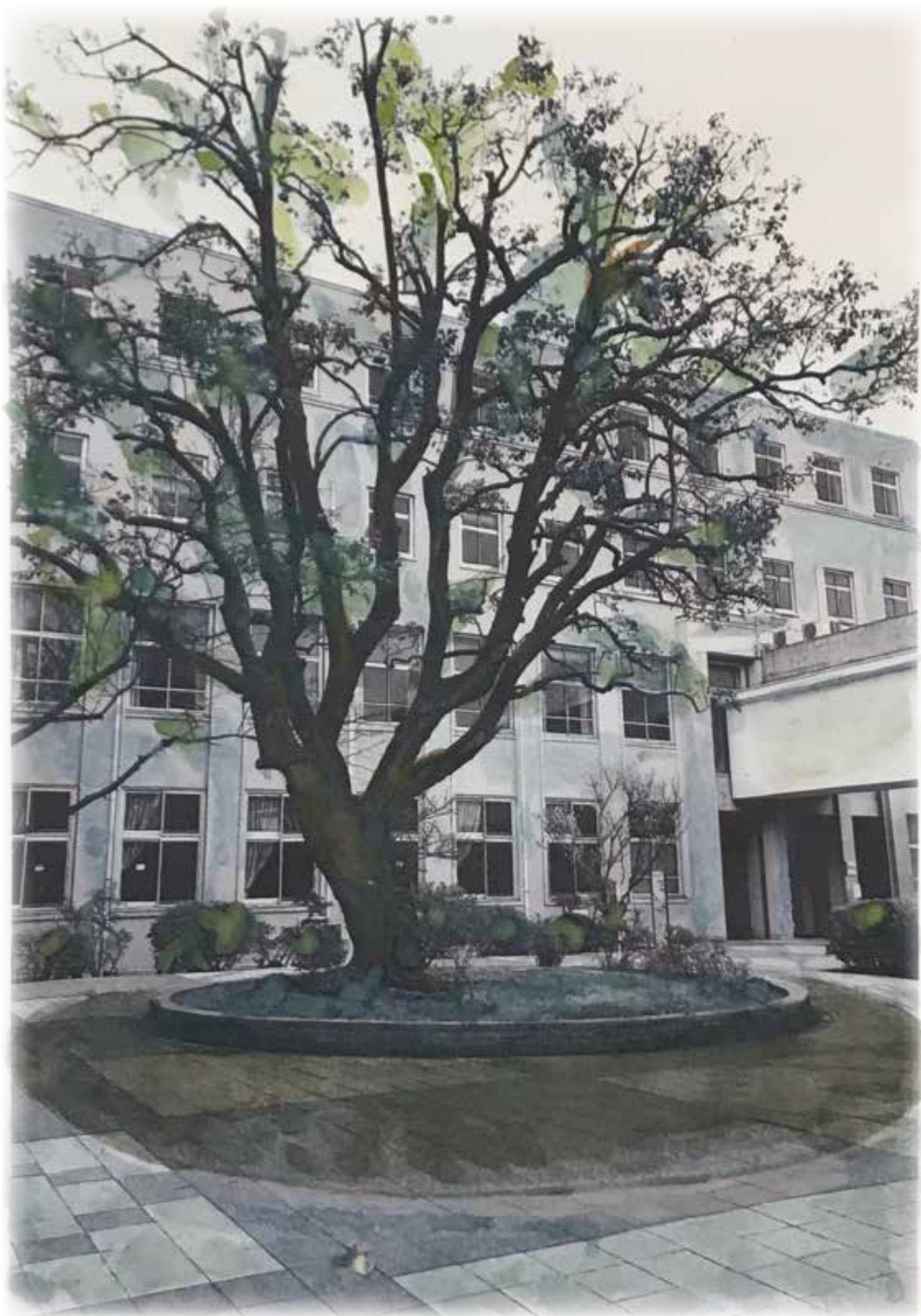
窓は陽の光が強いためかプラスチックの養生が施されている。



大きなガラス窓は樹木をテーマ（生命の木）にしたステンドグラス作品に変える。
銀化したローマンガラスのようにシックなイメージ。



D-1 特別な樹



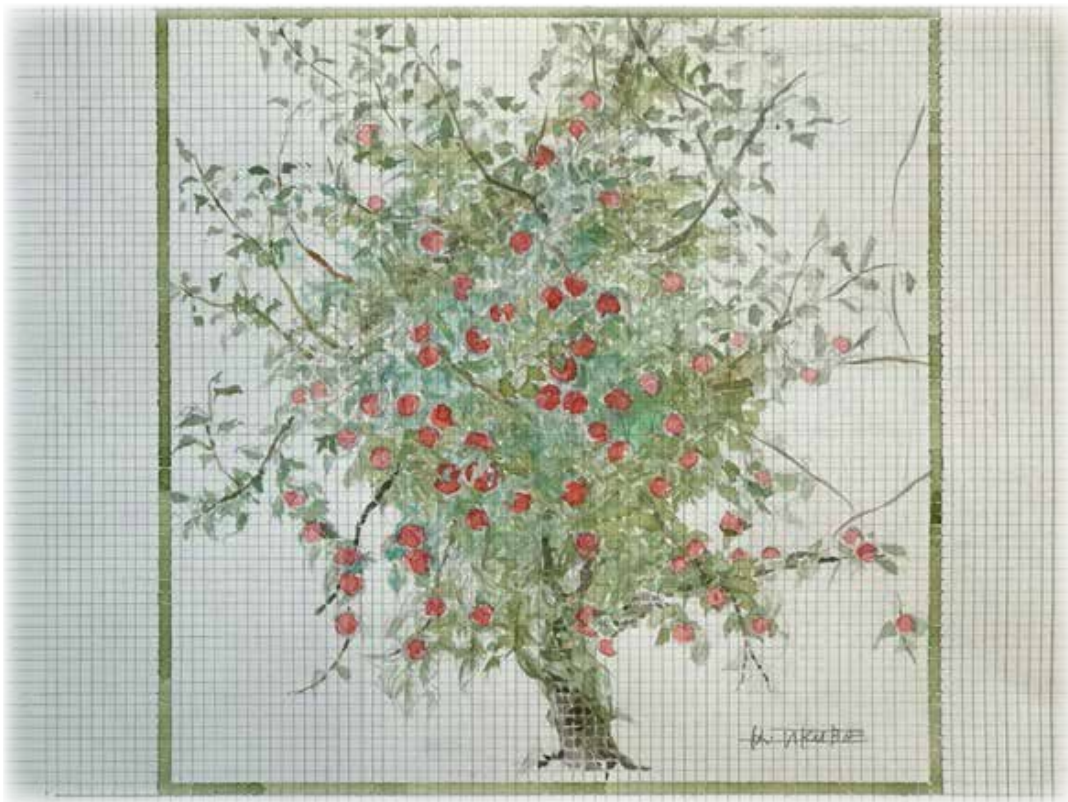
特別な樹のまわりにCORQ®を敷き、薄く水を張った水盤を設置する。



D-2 特別な樹



マリアンホール横に立つ特別な木



特別な木の下ステージを樹木や草花のイメージをモザイクタイルで描く。





ステンドグラスのイメージ



F-1 バラの小径



バラの小径のイメージ画



F-2 バラの小径

草花や樹木の間を通り抜ける小径にCORQ®を敷く。



G

日本風庭園



日本庭園風の庭とイス・テーブル (現状)



40cm×40cm40cmのミカゲ石によるイスのイメージ



H

図書館付近



図書館付近には「水」を使ったイメージを考える。



5-6 田窪先生から学生に送るメッセージ

地球温暖化を助長し生物多様性を破壊するように人類の世界人口は76億人を超えさらに増え続けています。

そして現在、我々はインターネットを通じたグローバル社会の中で国家の枠を超えて生きています。

その一方で人間がその生物学的特性により目の前で起こる出来事に対して動物的に反応し、直感的に判断し、自主的に行動して来た、ごく普通の行為が難しくなっています。その原因は資本主義と社会主義のイデオロギーに限界が生じているにもかかわらず新しい政治モデルも無く科学技術だけが進歩して、コンピューターソフトによって導き出された答えを根拠にした社会のシステムが成立し、多くの人々がこのシステムによってコントロールされるようになったことによります。

このような状況はこれまでの、1世紀単位の時代の変化ではなく、グーテンベルクによって発明された活版印刷機による世界の変化やメソポタミアで文字が発明された後の日常生活の変革のように数百、数千年単位で起こる人間文明の転換期と言えます。それほどコンピューターの出現は世界を変えました。

翻っておよそ400万年前に二本足で歩くようになった人類がヒト（ホモサピエンス）になり火を発見して調理を楽しむようになり、動物の骨で作った楽器で音を出し、ダンスに興じ洞窟の中に絵を描くようになりました。他の生物にない「芸術の誕生」です。

20万年前に2000~3000人で世界を移動し始めた人類は紀元0年にはローマやアレキサンドラ、中国の長安やインド、その他の場所に100万から20万人の都市国家を建設しました。そして18世紀の産業革命の頃には人類の人口は7億人に達し現在の人口爆発へと続きます。

言い換えればこれまでの人類の進化は道具を発明し産業や経済のシステムを考え人間の利益を追求するために頭脳的な知恵を進化させる一方で逆に人の心に響く芸術行為の深化は贅沢な無駄を追求する結果であると考えられるようになったことです。

時間が直線的で元に戻らない瞬間の連続であればプラスとマイナスのベクトルに分断されて進み、やがて消滅します。

例えばコインの裏と表の関係であるかのような利益と無駄、あるいは科学と芸術、頭脳と心のような真逆な関係であったとしてもその両方の先端を結びつけた、円、つまりループ状の存在として時間を考えた場合、人間社会の過去と未来における分裂と消滅を食い止めることができるのでしょうか。時間や歴史をループ的にとらえることは人間の頭脳と心の遊離を引き留めることでもあります。

今回の授業は三日間という大変短い時間の中での実験的な試みですが「自然」から「人工」へ、そして各自の個性を通じて「公共」について考えてもらえる事を期待しています。願わくばいつも



通学している大学のキャンパスの普通の風景を観察し、特定の場所の歴史に耳を傾け、より活性化出来る表現の現場を自分以外の人々にも感じさせてもらいたいのです。

同時にそれらの行為は自分が感じた特定の現場のイメージを具体的な「形」として表現することの困難さを体験することであり、そこで“閃いた”アイデアを温めながらそれぞれ学生が独自の風景をデザインするために試行錯誤するプロセスを経験することでもあります。

2020年4月10日

田窪恭治



5-7 「大切なことは目に見えてくる—不可視のものを形にする—」

聖心女子大学教授 水島尚喜

田窪恭治氏は、自らが「風景芸術」と命名するアートの形に取り組んできた日本を代表するアーティストです。既存の風景を、その場の歴史性や社会的な経験を原資として、未来に向けて再構築する手法のパイオニア的存在です。この優れてポストモダンの感覚に溢れる世界的アーティストが、美術を専門としない学生たちに向けてどのようなプロジェクトを展開するのか—私にとって大変興味深く、同時にこのプロジェクトへの参画が私自身の大きな学びの場となったことをお伝えいたします。

私の専門は美術教育学です。平たく言えば「学校という場でいかに美術を教えるか」に関わる教育の学問です。従来の美術教育の場では、「デッサンの仕方」といった要素的な内容を学習者に注入する、いわば学習過程を機械論的に捉え、「部分を集積したものが全体を構成する」という考え方が背景にあったと言えるでしょう。つまり明確な形ではないにしる、基礎を積み上げ、ステップ・バイ・ステップ式に学習者を「美術の覚醒者、達人とする」という趣が少なからずありました。しかしながら、現実の美術の受容には極めて多様な側面があります。論理的な積み重ねだけでなく「直感」や「縁起的な出逢い」によって成立する美術世界が厳然として存在しています。真摯な美術教育者は、そのギャップについて悩んできました。



今回のプロジェクトでは、「通常目にしていないキャンパス風景に、そうあってほしいとの願いを込めて、新しい風景の形を自らの手で生み出す。」という活動に学生たちが取り組みました。私自身、従来の自講座において「路上観察」、「考現学」、「発見学習」等を導入しながら、世界への眼差しをフィールドワークによって形成することを主眼とした授業を行ってきました。トップダウンの教え込みではなく受講者自らの気付きを大切にしてきました。その一方、田窪恭治という人格に触れながら実に多くの「なにごとか」を学生たちが学んでいることを目の当たりにしました。芸術に人生を賭したアーティストのスタンスは、方法論を超えた感化力となっていること、すなわち真性のアーティストの存在そのものが最高の教材であり、本物との出逢いを通して学生が成長していることに気づかされたのです。単なる一講座の授業ではなく、「質」の伝播という点において、学生の変容において、著しいものがありました。

プロジェクトでは、キャンパス内でのフィールドワーク以外でも、造形的な言語、それは、技法



であったり、素材であったりしますが、色や形による造形世界への多様なアプローチや見方が示されました。世界の可能性が、目の前に開かれ、学生たちは「こんなことも出来るんだ！」を体感しました。このようなメソッドは、方法論というよりも、学生と美術の一回性の出逢いとして、位置づけられると思います。目的や計画性を基軸とする近代の教育原理とは異なった、人間の可能性の開示そのものに焦点化しているといえるでしょう。未来社会を形成するであろう「学生の可能性」を、自身の造形ワークショップを通して広く教育者に問いかけている、とも私には受け止められました。

一般に、大学の授業では座学に終始することが多くあります。その場においては、記号や概念

の体系を学ぶことになりがちです。差異によって感覚された情報の共通項を見出し、同じであることを元にして括られたものが「概念」です。その概念は社会の成立の規範となり効率をもたらします。このような記号化された内容は、一般に一義的な意味世界に関わっていると言えるでしょう。

一方、美術における創作活動においては、主体的な無限の形（意味）の可能態の追及にその本質があると言えます。眼前に無いものを生み出すことは、想像力を原資として、新しい人類の文化を生み出すことに貢献します。この点において、自らが感覚した「そこにある」というアクチュアリティから出発し、風景を読み替え、価値転換していく創造的能力は、いわば文化を生成する能力そのものと言えます。受講生一人ひとは、主体的な造形文化の体現者であり、そのことの覚醒が、何よりも大きな成果であったように思います。

さらに、目的の明確なプラン型ではなく、目の前にある現前の風景を自身の経験の網の目を照らし合わせ捉え直し表象をリビジョンしていく、このような未来投機的に未然形を可視化しようと試みは、「解無き時代の教育」を打開する鍵となるのではないのでしょうか。

今回のプロジェクトにおいては、新型コロナウイルス禍の影響もあり十分なフォローアップができない部分がありました。大きな反省点ではありますが、受講生たちの作品からは、一人一人の作品展開の中で、思考が可視化され、明確な創造的思考が展開されていることが明快です。一回性の貴重なドキュメントが、本報告書に記録されることを通して今回のプロジェクトの意味合いが普遍化されることを願っています。



提 言 集

本報告書では、サステイナブル・キャンパスのためのエッセンスについてエネルギー・食・ゴミ・運営・文化（アート）の観点から聖心女子大学の素晴らしさと課題について検討してきました。国内外の優良実践や田窪恭治先生をお招きして行った特別講義&ワークショップに参加した学生および田窪先生ご本人によるアイデアには示唆に富む知見を見出すことができます。

最後に、本学におけるサステイナブル・キャンパス実現に向けた、学生による提言集を掲載します。提言集には初級・中級・上級の3つのフェーズを設けました。初級では時間と手間隙をあまりかけずぐにでもできるアクション、中級では少しのお金と時間をかけて1~3ヶ月程度で行うべきアクション、また上級では予算の検討を重ねて中長期で実現すべきアクションを提案しています。

是非この提言集をサステイナブルな聖心女子大学の実現にお役立てください。

本プロジェクト参加学生有志

初級

- 一、大学内でどのくらい電気が使用されているかを建物ごとに調べ、エネルギーの削減目標を立て学生と職員に意識を高めてもらう
- 二、「聖心キャンパス」にサステイナブルキャンパスの連載を組み、エネルギーの削減目標等を開示し、達成度を報告する
- 三、自動販売機がどのくらい使用されているか調べ、使用頻度の低いものは撤去する
- 四、使用していない教室の電気を消すことや使用していない電化製品のプラグをコンセントから抜くことを学生や教職員に啓発する

- 五、学内で食べる食材の生産者がわかるように、学生食堂やカフェに写真付きのポップを掲示する
- 六、食堂やカフェの職員と交流を深める文化（あいさつの文化）を形成する

- 七、ごみ排出量を教職員および学生が可視化できるようにする

- 八、学内関係者や一般の方にダイベストメントの啓発活動をする
- 九、大学から資金提供等の支援を受けながら、学生自身がサステイナブルな大学にするための運営の意思決定に関わる運営体制へ改善する
- 一〇、「100%ペーパーレス教授会」を実現し、「聖心キャンパス」や大学のFacebookで報告する

- 一一、キャンパス内に広がる自然の中で多くの学生が歓談できるよう、屋外に設置されている椅子やテーブルの数を増やす
- 一二、図書館やBE*hiveなどの室内にはくつろいで学べるソファや低いテーブルを設置する

中級

- 一、大学内の照明をLEDライトに取り替える
- 二、自動販売機を省エネ型のものに取り替える
- 三、試験的に大学内のある一角にソーラーパネルを設置する

- 四、学内の取り組みと地域とのつながり（商店街とのコラボ企画など）をつくる
- 五、学生食堂やカフェで使用する食材の学内生産率を高める
- 六、四号館の屋上に畑(エディブルガーデン)を作り、学校菜園を行う

- 七、学生食堂やカフェで出る生ゴミ、馬術部の馬糞等を学内の畑の肥料として再利用する
- 八、廃油からエコ石鹸づくりをし、四号館はじめとする学内で使用し、さらに啓発活動の一環として学内販売も行う
- 九、食堂やカフェの廃棄物をコンポスト「キエーロ」で堆肥化し、畑や植物の土壌で再利用する

- 一〇、個人や所属する組織の銀行口座としてクールバンクを選択してもらう
- 一一、大学で配布する広報用のファイルを環境負荷の少ない素材に変更する
- 一二、e-waste（電気電子機器廃棄物）のリサイクル率を上げる
- 一三、教職員の名刺にエコペーパー（バナナペーパーやゾウさんペーパー）を使用する
- 一四、大学パンフレットはFSC認証の紙や「環境印刷」を使用する
- 一五、毎月、学生主体で教員と職員のサステイナブル・キャンパス創成委員会（仮称）を開いてエコ化の進捗状況などを確認する
- 一六、学外周知のための「聖心女子大学の十大サステイナビリティ実践（マップ）」を作成し、大学のホームページに掲載する

一七、古紙を再利用して「聖心エコキャンパス・カレンダー」を学生主体で作成し、オープンキャンパスや学園祭で販売する

一八、売代ショップの商品の二割をエコグッズにする

一九、食堂等に寝転んで休憩できるスペースをつくる

二〇、学寮の横にある空き地に寝そべったり、深呼吸をして心に余裕を作ることができる場所をつくる

二一、門の左側にある壁にシーガラスを貼り付け、心地よさを感じられる大学の入り口にする

二二、三号館三階テラスにハンモックなどを設置し、横になれる憩いの場をつくる

二三、図書館前の広場を環境に配慮した材料などを使い、ゆっくりとくつろげる明るい空間をつくる

二四、一号館の中心にある中庭に学生や教職員の憩いの場をつくる

二五、卒業証書をバナナペーパー（途上国で育てられたオーガニックバナナの茎の繊維に和紙の技術を用いて作られたエシカル紙）でつくる

上級

- 一、建物内に太陽の光をうまく取り入れるようにするための窓を増設する
- 二、全学的に節電・創電を徹底し、まずは四号館等の屋上でソーラーパネルを設置する
- 三、大学内で創出・消費している電力の数値を、大学を利用する誰もが確認できるシステムを導入し、ホームページで公開する
- 四、クリスマスのイルミネーションを100%自然エネルギーにする

- 五、大学から近い生産地の食材を使うようにする
- 六、多くの学生が畑作業に参加することで単位が取得できるような仕組みを整える

- 七、日本にあるカトリック大学として初のダイベストメントを実施する
- 八、エコ施策マップを大学運営に導入する
- 九、制服をオーガニックコットンを使用したものにする

- 一〇、メインキャンパスから4号館までの坂道を芝生にしたり、陶版画にしたりすることで清々しくし、発電アートを設置する
- 一一、食堂から直線的な柱を取り払い、窓に工夫をし、キャンパスの豊かな自然が包み込むような食堂にする
- 一二、一号館に赤いレンガとゴールドの窓枠を付け、さらに入り口に土手をつくる
- 一三、図書館やBE*hiveの一角にラーニングコモンズ（くつろいで学べる空間）をつくる
- 一四、お御堂のスタンドグラスに「いのち」や「サステイナビリティ」を表した絵を描いて、伝統と未来への希望が出会う聖心女子大学ならではの空間にする
- 一五、「おくら（駐車場横）」をエシカル・カフェとして開放し、学生主導のインキュベーション・センター（新たなアイデア等が生み出される空間）にする
- 一六、キャンパスの要所要所にサステイナビリティを象徴するアート作品を置く

参考文献

1 エネルギー

1-1 エネルギーに関する聖心女子大学の現状

- ・聖心女子大学 総務課資料 「エネルギー使用量（3年間）」
- ・聖心女子大学 総務課資料 「省エネ診断（2018エコリーグ）」

1-2 事例紹介

(1) 千葉商科大学

- ・千葉商科大学 「環境・エネルギーへの取り組み」
[https://www.cuc.ac.jp/about_cuc/activity/environment/index.html]
(2020年3月20日閲覧)
- ・千葉商科大学 「キャンパスの太陽光発電設備」
[https://www.cuc.ac.jp/about_cuc/activity/environment/solar/index.html]
(2020年4月14日閲覧)
- ・千葉商科大学 「目標達成へのスキーム」
[https://www.cuc.ac.jp/about_cuc/activity/environment/scheme/index.html]
(2020年4月14日閲覧)

2 食

2-1 食に関する聖心女子大学の現状

- ・(株) 第一食育研究所 「2020年3月・4月品目予測表（2020年3月）」
(学生食堂提供資料)

2-2 事例紹介

(1) シューマッハー・カレッジ

- ・辻信一（2013）『英国シューマッハー校 サティシュ先生の最高の人生をつくる授業』講談社

- ・ Phillips, Anne. 2008. *Holistic Education Learning from Schumacher College*. Green Books.
- ・ Schumacher College. 'About the College'.
[<https://www.schumachercollege.org.uk/about>] (Accessed: March 20th, 2020)
- ・ Schumacher College. 'Schumacher College Gardens and Food'.
[<https://www.schumachercollege.org.uk/schumacher-college-gardens-and-food>]
(Accessed: March 20th, 2020)

(2) アジア学院

- ・ アジア学院のホームページ [<http://www.ari-edu.org/>] (2020年3月20日)
- ・ 「アジアの土：アジア学院からのニュース」 2020年2月15日号、通巻177号

(3) 武蔵野大学 ロハスカフェARIAKE

- ・ ロハスカフェ [https://www.lohascafe-ariake.net/ariakenote/vol_053.html]
(2020年4月19日閲覧)
- ・ 山本茉由 「武蔵野大学 ロハスカフェARIAKE」 『Campus Scope』, 2019, vol.43, p12
- ・ U. P. LAB (アーバンパーマカルチャーラボ) <https://uplabmu.com/>
(2020年4月19日閲覧)

(4) PLANTIO 屋上菜園 サステナパーク恵比寿プライム

- ・ PLANTIO ホームページ [<https://plantio.co.jp/>] (2020年4月12日閲覧)
- ・ Grow Journal ホームページ [<https://media.plantio.com/urbanfarming/>]
(2020年4月12日閲覧)

3 ゴミ

3-1 ゴミに関する聖心女子大学の現状

- ・ 聖心女子大学 総務課資料 「再利用計画書2016～2018」
- ・ 聖心女子大学 総務課資料 「『事業用大規模建築物における再利用計画書』裏面 作成用ワークシート2016～2017」
- ・ 聖心女子大学 総務課資料 「学内データ（食品ロス）2018」
- ・ 聖心女子大学 総務課資料 「ごみ処理・リサイクルフロー図」

3-2 事例紹介

(1) 資源リサイクル率12年連続日本No.1大崎町

- ・大崎町役場 「菜の花エコプロジェクト」

[https://www.town.kagoshima-osaki.lg.jp/jk_kankyoutaisaku/kurashi/gomi/recycling/ecoproject.html] (2020年3月20日閲覧)

- ・大崎町役場 住民環境課 「混ぜればごみ、分ければ資源！」

(2020年2月訪問時配布資料)

(2) 環境モデル都市・水俣市のゼロ・ウェイストに向けた取り組み

- ・エコネットみなまた 「水俣病の教訓から生まれた企業組合～エコネットみなまたの実践」 (2020年2月訪問時配布資料)

- ・水俣市環境クリーンセンター 「ようこそ水俣市環境クリーンセンター・水俣芦北広域行政事務組合クリーンセンターへ」 (2020年2月訪問時配布資料)

4 運営に関する聖心女子大学の現状

4-1 運営に関する聖心女子大学の現状

- ・聖心女子大学・文学部 教育学科 永田佳之研究室

[<http://nagata.lab.u-sacred-heart.ac.jp/studytour.html>] (2020年3月20日閲覧)

- ・聖心女子大学 学生団体

[<https://www.u-sacred-heart.ac.jp/student-support/campus-life/activity/>]

(2020年3月20日閲覧)

4-2 事例紹介

(1) グリーンオフィスモデル

- ・Explore 23 Green Office case studiesウェブサイト

[<https://www.greenofficemovement.org/green-office-case-studies/>]

(2020年4月14日閲覧)

- ・Green Office Movement ウェブサイト

[<https://www.greenofficemovement.org>] (2020年3月20日閲覧)

- ・rootAbilityのウェブサイト[<http://rootability.com/green-offices/>]

(2020年4月14日閲覧)

囲み記事② ヨーロッパ諸国の取り組み

- ・ Explore 23 Green Office case studies[<https://www.greenofficemovement.org>]
(2020年3月31日閲覧)
- ・ Introduction to the Green Office Model –Webinar 10 May 2017
[<https://www.youtube.com/watch?v=026pkqsisbM>] (2020年3月31日閲覧)
- ・ introducing the new Green Office team. Maastricht University
[<https://www.maastrichtuniversity.nl/news/introducing-new-green-office-team>]
(2020年3月31日閲覧)
- ・ Green Office Universität Hildesheim
[<https://www.uni-hildesheim.de/greenoffice/neuigkeiten-events/>]
(2020年3月31日閲覧)
- ・ Kompetenzzentrum Nachhaltigkeit Universität Hamburg
[<https://www.nachhaltige.uni-hamburg.de/>] (2020年3月31日閲覧)

(2) Operation Green (オペレーション・グリーン)

- ・ Operation Greenホームページ [a href="https://operationgreen.info/">https://operationgreen.info/]
(2020年3月20日閲覧)

(3) 千葉大学

- ・ 千葉大学環境ISO学生委員会「千葉大学の学生主体による環境マネジメントシステムの仕組みと効果」(2019年12月訪問時配布資料)
- ・ 千葉大学環境ISO学生委員会(2019)『2019年度版ガイドブック』, p.3

(4) ダイベストメントの提案

- ・ 永田佳之(2019)『気候変動の時代を生きる：持続可能な未来へと導く教育フロンティア』山川出版社 pp.72-77
- ・ 日経新聞 2020年4月14日
[<https://r.nikkei.com/article/DGXMZO58039820U0A410C2MM8000>]
- ・ 350.org Japan (2018)『民間金融機関の化石燃料及び原発関連企業への投融資状況2018』
- ・ 350.org Japan ホームページ [a href="https://world.350.org/ja/350/#principles">https://world.350.org/ja/350/#principles]
(2020年3月20日閲覧)

- ・ 350.org Japan ホームページ [<https://world.350.org/ja/press-release/191205/>]
(2020年3月22日閲覧)
- ・ Bright Now towards fossil fuel churches ホームページ
[<https://brightnow.org.uk/news/epiphany-declaration-20-christian-organisations-divest/>] (2020年3月22日閲覧)
- ・ fossil free: divestment ホームページ
[<https://gofossilfree.org/divestment/commitments/>] (2020年3月22日閲覧)
- ・ Guardian [<https://www.theguardian.com/education/2020/jan/13/universities-divesting-from-fossil-fuels-have-made-history-but-the-fight-isnt-over>]
(2020年4月13日閲覧)
- ・ Glasgow Guardian
[<https://glasgowguardian.co.uk/2019/09/04/university-of-glasgow-ahead-of-schedule-in-its-plan-to-divest-fully-from-fossil-fuels/>] (2020年4月13日閲覧)
- ・ University World News
[<https://www.universityworldnews.com/post.php?story=20200310143004253>]
(2020年4月13日閲覧)

その他

- ・ 日本文教出版Webマガジン 「学び！とESD」
[<https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/esd/>]
- ・ 山内祐平 編著 (2010) 『学びの空間が大学を変える：ラーニングスタジオ、ラーニングコモンズ、コミュニケーションスペースの展開』 ボイックス株式会社
- ・ S. スコット S. ウィットフト (2012) 『メイクス・スペース：スタンフォード大学dスクールが実践する創造性を最大化する「場の作り方」』 阪急コミュニケーションズ
- ・ P. B. Corcoran and Arjen E. J. Wals (eds.) (2004) *Higher Education and the Challenge of Sustainability: Problematics, Promise, and Practice*. Kluwer Academic Publishers.
- ・ Stephen Sterling, et al. (eds.) (2013) *The Sustainable University: Progress and Prospects*. Routledge.

むすびにかえて

この度の調査は半年にも満たない短い期間ではありましたが、学生たちは実に深い、価値変容をもたらすほどの学びを経たと言えます。この場をかりて、こうした機会を与えてくださった学内外の方々に改めて御礼を申し上げます。

彼女たちの学びはまさに聖心スピリットが涵養される過程、つまり「個としての自己を確立し、かつ地球を共有する人類の一員として世界を視（み）、人々と交わり、そしてこれらの重要な関心事に自ら関わることのできる広い視野、感受性、柔軟性および実践的な行動力を持つ人間」が育まれていくようなプロセスとなりました。

特に、国内での訪問調査では多くの方々との出会いを通して一人ひとりの学生が自己変容を経たと言えます。この報告書をまとめていた4月12日に、水俣で学ばせていただいた学生たちの姿がたまたまNHK「こころの時代『水俣いのちの海のただなかで』」で映し出されました。水俣の語り部である緒方正実さんの言葉に全身で聴き入る学生たちは深い学びを体験していたことがよく伝わってくる番組でした。

この番組のもう一人の語り手である緒方正人さんが淡々と語る次の言葉はこの報告書のメッセージとも通底するだけでなく、まさに新型コロナウイルスで苦しむ現代人へのメッセージであると思われるので、ここに紹介いたします。

他の生き物を無視して経済成長を遂げ、環境破壊を繰り返してきたことを思えば、私たちのこれからを考える上でも、これからとこれまでを考える上でも、他の生き物の存在を問いの中に入れておかないと、人間中心主義の社会はほろびざるを得ないですよ。

本報告書を学生たちと編んでいる今も、全国で、そして全世界で感染者が増え続けています。この報告書に込められた学生たちの想いを実現するための一歩を踏み出せる希望の時代が直にやってくることを願いつつ、むすびとさせていただきます。

2020年4月30日

「持続可能な社会の創り手育成に向けた PBLの推進」事業

世話人・永田佳之

2019 年度教育改革等推進経費

サステイナブル・キャンパス構想に向けた
アイデアと知見

聖心女子大学の現状と国内外の実践事例からの展望

「持続可能な社会の創り手育成に向けた PBL
(プロジェクト・ベースト・ラーニング) の推進」事業報告書

2020 (令和 2) 年 5 月発行

代表：永田佳之

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1

聖心女子大学

TEL：03-3407-5914

E-mail：yoshy@pobox.com

印刷：チヨダクレス株式会社

TEL：03-3256-1361



聖心女子大学

University of the Sacred Heart, Tokyo

